



^ 13  
1191  
5



1191  
5

13  
1191  
5

想山著聞弁集卷の五

目録

- 一 折石観音利益の事
- 一 蛇の執念小蛇と吐虫と事
- 一 天狗の連打と鉄砲の妙と終末の者事
- 一 には蜂の酒英一は蜂の飯事
- 一 附蛇記の事
- 一 馬の言ふ事
- 一 狸のく化と相對死と事
- 一 磐石の事
- 一 蛇貝の觀世音菩薩現し居事
- 一 蚊蚋の冥途と事
- 一 英割蟹と化事

想山著聞  
弁集卷五

目録

- 一 線道玄猪と截する事
- 一 緦懸乃ゆきと吳興と捕する事
- 一 猫俣光彦より化居する事
- 一 弟本於と化居する神社の事

柳谷観音利益の事

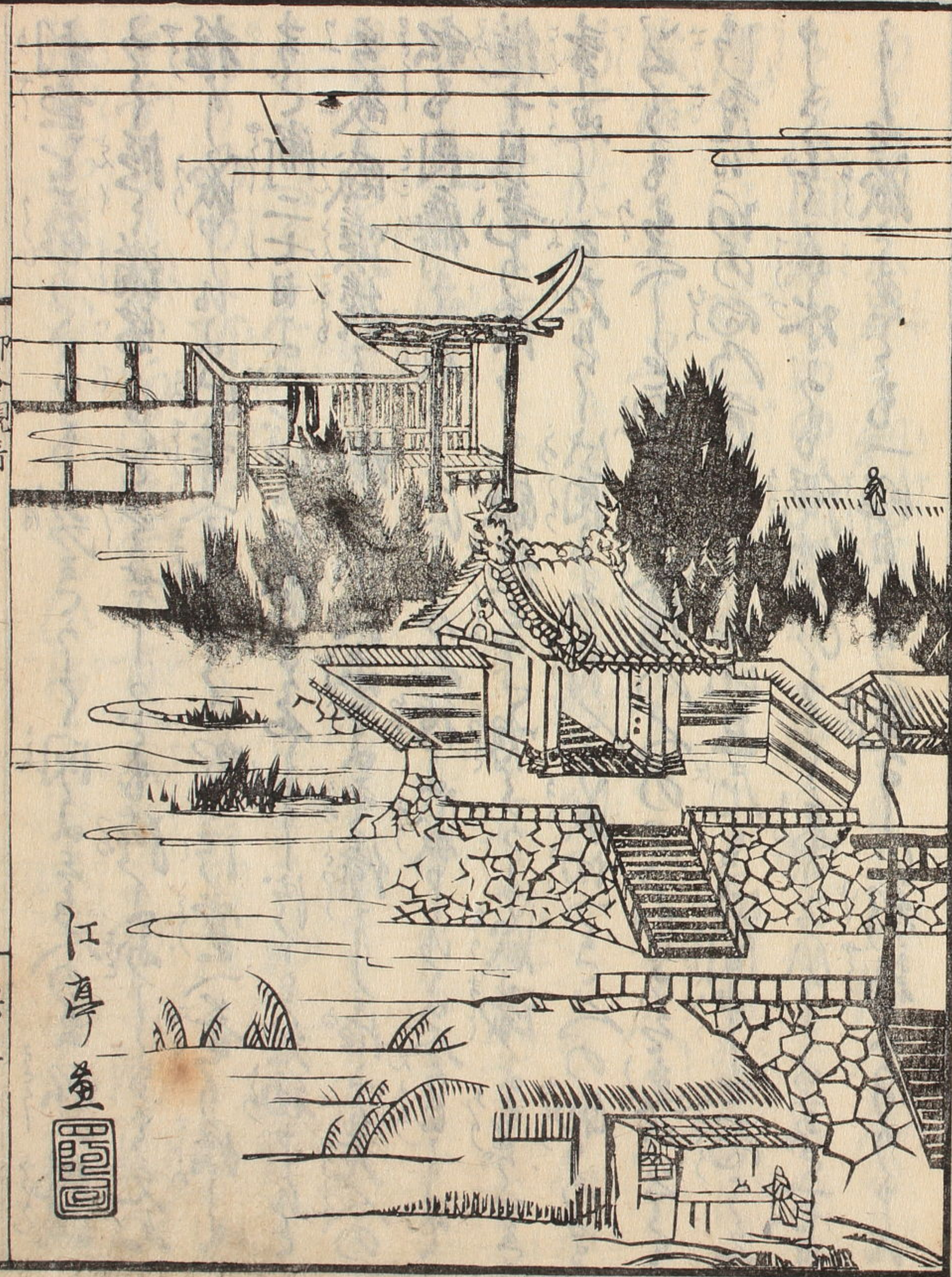
京都西山の月神の方より南に二里許の楊谷と云所  
浄土宗粟生のあり玉願山楊谷寺光明寺ホといふ寺あり

畧縁起の趣より一、西山八人皇女十一代

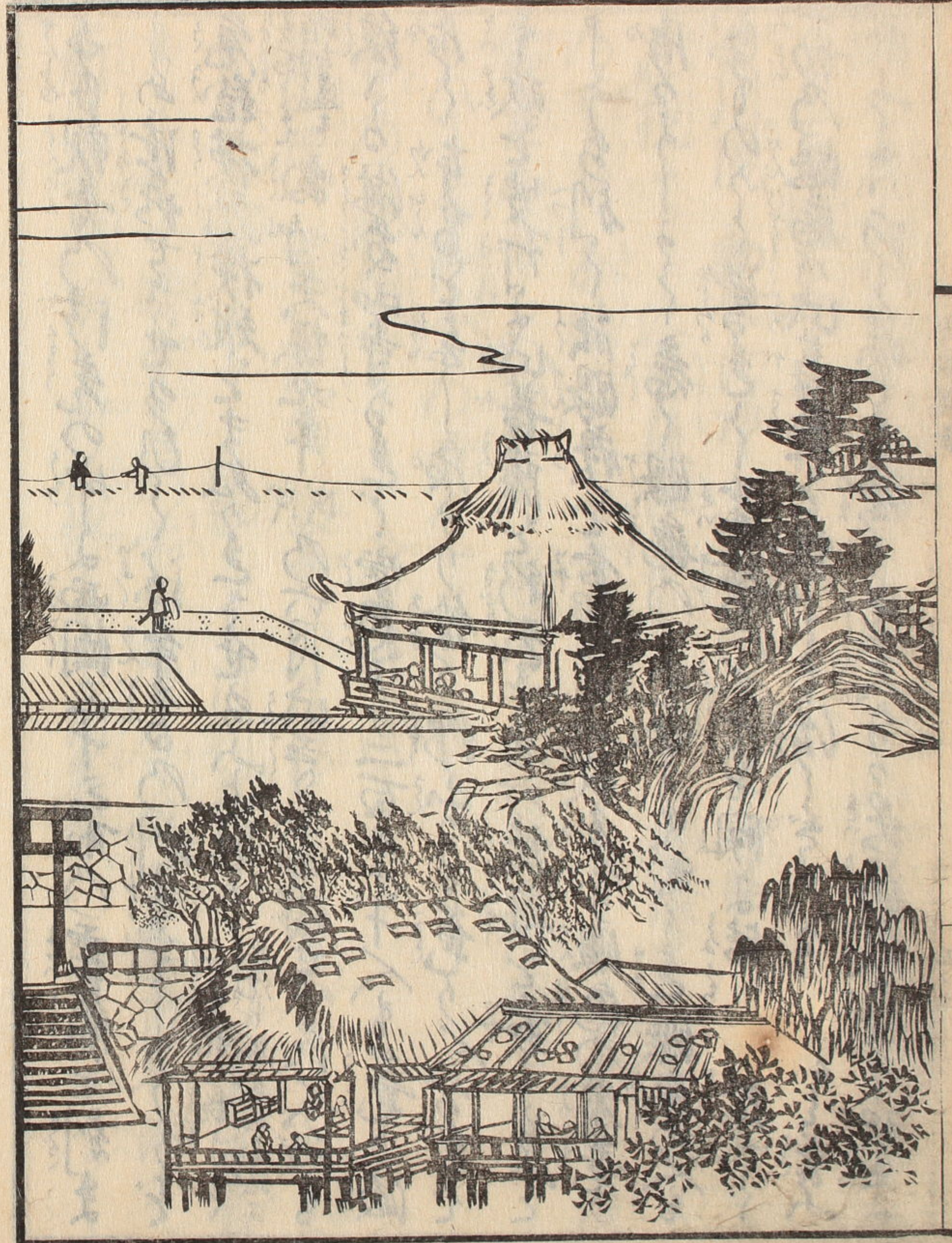
平城天皇の御宇大同元年秋定法信都草創の地之  
 幸言ハ子日少眼親善菩薩脇土ハ將軍地産民休天也  
 右中言ハ春日大明神の法化といひ或は化人の化たり  
 主護觸ハ定法洛東に在 内夢申ハ化人の言と蒙りて  
 西山の柳谷より一、感得より一、建立より一、ありとありと  
 とい傳ハその後弘仁年中弘法大師も此山より十三佛の  
 石像と刻ミ溪谷より安置 ありと一、字今もなる惠心  
 僧都も此山より一、飲末淨土の修修ハ此地より

一々石に多佛三昧の如く其の菩薩常に本蓮を  
 多色を淨く名付あり又  
 白門院 勅命に依り水鏡之七堂伽藍と建立し  
 莊観あり其後地震兵亂あり破壊せしむるも其  
 の重なる海濱あり其端多あり其の寺長は  
 室室志蒼之人南入り堂七間四面の佛閣と建立  
 あり其の幸堂あり代々  
 帝乃 勅命あり 淨信作法あり  
 東山院 靈元院の 勅命あり其の美あり寺  
 量室是海之人 勅命あり 淨信作法あり  
 其の幸堂あり其の前の唐戸を外家物淨信作  
 新崇賢の院も淨信作あり 淨信作の法子細あり

子親音の法光の中又西國二十二年の靈像と刻ま  
 れ法光せきせあり淨信作の別室あり  
 危殆横死横難とまぬるをせあり其の  
 後より淋安山寺の堂あり二百六十人も薨り波  
 唐く在るなり唐より餘り作る薨りくあり色を  
 其故と改行し其菩薩と刻なり其病を愈めあり  
 中より列し其眼病を愈めあり其故より眼病の者薨り  
 唐より其眼病の世より其眼病の人も  
 多あり其眼病を愈めあり其眼病の者薨り  
 一切の眼病は其菩薩と信し其病を愈めあり  
 其病は其病も餘り廣大なる其病は其病なり



江湾画



利益と慕りたるも多きうと回しき人の云私ハ眼  
うく修し満當もとせしうも終はあしもえぬ  
松ノ成りゆはは寺へ来るも一ツ法堂(兼り始も  
まど漸二七日よ及びりぬよまや少一げくえ袖やれと  
云故感嘆擔り徹せしに成りし傍り居る老人の  
私も月齋と成りしにえぬ後成りしは今日りて  
僅十日兼り居りし眼精もぞろろ成後まじりて  
事也と云たりしは肉の育人と成切ごころの物つも  
ころもあぶと回し又傍りの人の云ふまははこそ  
法座の河の向の方よ居る比色尼もは回中をるま  
ゆきぎも水も繩傳ひゆくもあひひもまじりて  
りし成りしも一昨日より繩すに松松よりゆりゆり

あまの平ハ平ハ利益のまじりて又傍り者の云  
みち回きし河の二乃法座は居る焼くもまじり  
繩すにも水に松すに成りしはあまの美の育目と  
成居るも一ツを向の壇も今終よりいき人もあり  
仍中りにありしうろろまね法座は回しよごもあま  
時まじりよあまの道もまじりて一七日或ハ二七日三七日  
あまの平ハ平ハ利益のまじりて又傍り者の云  
みち回きし河の二乃法座は居る焼くもまじり  
繩すにも水に松すに成りしはあまの美の育目と  
成居るも一ツを向の壇も今終よりいき人もあり  
仍中りにありしうろろまね法座は回しよごもあま  
時まじりよあまの道もまじりて一七日或ハ二七日三七日  
あまの平ハ平ハ利益のまじりて又傍り者の云  
みち回きし河の二乃法座は居る焼くもまじり  
繩すにも水に松すに成りしはあまの美の育目と  
成居るも一ツを向の壇も今終よりいき人もあり  
仍中りにありしうろろまね法座は回しよごもあま  
時まじりよあまの道もまじりて一七日或ハ二七日三七日

見るよ阿弥陀堂の並びの方より廟をく目に見えぬ  
よの右傍とくより〜〜〜役所へ移つる〜目今居る  
うらやもその縄は使ひ〜移りしもの〜もも量米の〜  
悉く利益とん使物〜ゆりし事〜思ハ感涙も  
此の兼〜りう程とりの利益事と於右の當後ホもえ  
何故書形〜るるや正番り思ふ事〜は堂よりこの  
麓る〜とハ新なる事〜也内うも病人の毛せ〜  
も羨棟も〜〜移り〜り内前乃たちよ西屋を正  
本を正之席とらふなる米屋〜は二軒の〜右麓り  
人の禁出〜と〜〜事〜平もい家よ入〜  
せ〜に重役の事〜成〜令〜多人救乃合事と極へ  
居るのり冬ハ人数減〜〜六七十人と成其ハ二三百

四五百人〜も移る事〜〜の〜幸堂の〜ももの  
阿弥陀堂ホ〜色えは〜麓り居る事〜兵も廣大  
之を乃妙智力ある故常〜諸人よ志せ〜後見  
岐文の事と〜修死〜  
地乃執念小地と吐出と事  
續別名松の内は林〜り地り〜一帯乃林也〜この  
林ち乃毛よ去後りり〜去後乃其の庇よま〜米と  
忽〜出入〜るなり〜  
るハ二回施福〜り〜回〜松り〜去後を或時ちサ守  
此の餘も〜と〜蛇は去藏の根より〜去藏のまど  
庇〜よ米雀の巢と目分思ハ入居〜〜この根  
米巢と移〜い〜花想〜〜も〜ハ三回福も満ち

居るまゝ花接りのほゞ〜〜もたより下へ〜〜落重  
ども又面々樹と信じてえ乃と露の面根よりあり  
初め乃〜の葉とみ〜居〜花付たるよ〜及〜も  
の〜下へ落り朝の〜まる事色数十日程よ及〜  
ども花思ひ止む〜花付たる落の事数十夜り  
〜もつよ〜精を敬〜身命と抛〜花付たるゆゑ  
の〜後ハ何〜思ひい〜治身よ見物乃  
くも多〜集ひ〜目も難〜終自らぐめ居るからり  
〜向り〜の花花ある勢ひは〜り小地と世想〜その  
小地ハ思の〜花付た〜又花付ほゞ〜下へ  
落〜更切は死〜あ〜の小地ハ何の事と見居  
〜の〜粟乃方〜運送警時の内〜忽ち二三人のたひ成

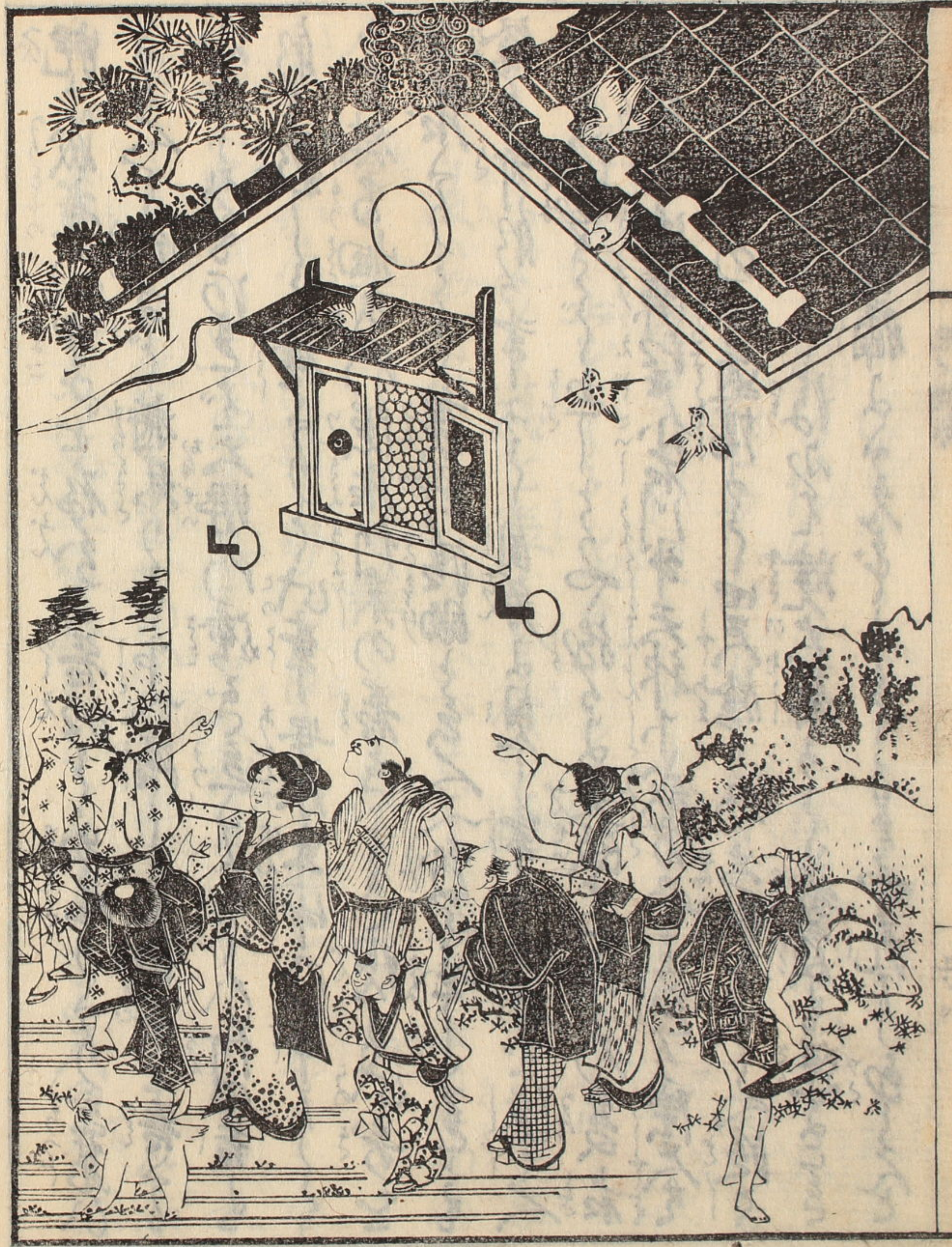
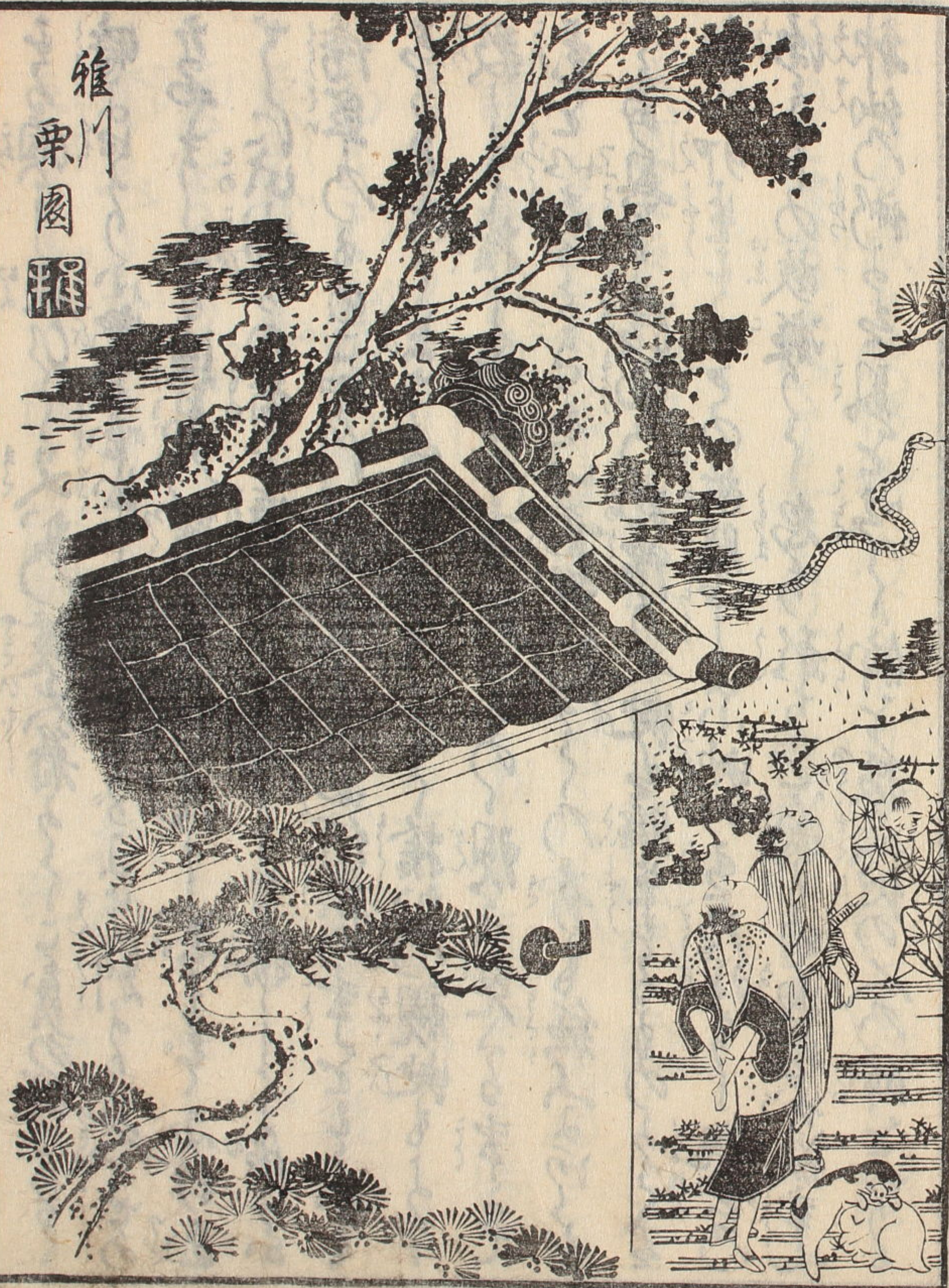
蛇と成雀乃ゆよと存らよ吾は〜出居り〜り三葉の  
〜り〜行き〜持来り〜下へ落〜ゆよと吾は  
〜り〜みもゆよを大母乃強ぶ〜り〜ひ竹の若も  
の〜敷〜捨〜り〜事安永年中の事〜り〜  
の林も畑乃隠居何某の着〜り〜現〜ひ身と  
見居〜り〜廣野清助と云人へ〜り〜色も  
餘り奇なり事〜り〜自身よ見〜事〜り〜孫を深〜人  
めと〜り〜也〜り〜文政十二年の夏右  
清助乃近隣は小衣川中天神下或方乃も早り陸を  
右天神下の水道場〜り〜田屋陰り乃大蛇と〜り〜  
教の〜り〜ほろを焼火着〜り〜幾夜も運〜り〜  
〜り蛇と若痛よ〜り〜も〜り〜死〜り〜と



雅  
栗園  
雅

蛇ノ執念

五ノ七



とる頂より及びく又かの焼大着うくくはの海せの  
時ははより小蛇と出づりさもまがよは先刻より久くせあ  
なるまゝなる法親の隆人も肝と清く思ふもむげ出  
せしは小蛇の者と連なりたり傍り見物く居るふ  
傍軍のよのこやのけ色くハ必竹松の事とまか  
あもまゝく云ふ由くは踏清く捨かの親蛇もく  
殺く捨くまゝく事なるもの現る見入る事よそ  
是と心あるまゝ前渡別まゝの事も能くはくも  
まの母より法曲のお清く之蛇を胎まゝなるものうく  
の卵まゝなるもの故腹中よ小蛇のまゝなり観念の  
清くその故凝く思ふ形と成るもの成る事成事  
神仙の術と云ふとまゝく作と後又他の人の作と  
なり

事もまゝ或は鉄拐仙人のまゝく自身の作と出せも  
りりと安なるまゝなる事なりく蛇執のまゝ事と  
なり

我國名古をの真廣寺の光僧は記と同一と  
りく京之条の佛現寺の住持所載中の因ゆりこの  
證具寺(本願寺)の法使僧よりく運回して法信と  
なり居るまゝく法華堂の裏の方ハ雲籠るるよ遠  
高きまゝ屋根の及の回り萱葉と無居く雛鳥の  
巢と無居る居ると下り蛇の尻と見入るるや二三日  
息とつらめ借居く尻と首とまゝくよまゝくも竹を  
賣るまゝ事も叶ひくく遂は挿るまゝく真直り  
まゝ居る居る後居る御色焼びく蛇をまゝ切よ死る

其時、日食を居る雛鳥も死す。是れも、日食も、  
 落たり、是行故と云事更に、いぬおの産と、  
 料理見ると、腹中より、のこり、と、  
 のこり、と、裂見ると、より、  
 現り、見ると、あり、  
 無而下、あり、と、  
 とも、あり、先、  
 記、  
 天物、  
 文化、  
 以者、  
 先自、

天物、  
 文化、  
 以者、  
 先自、

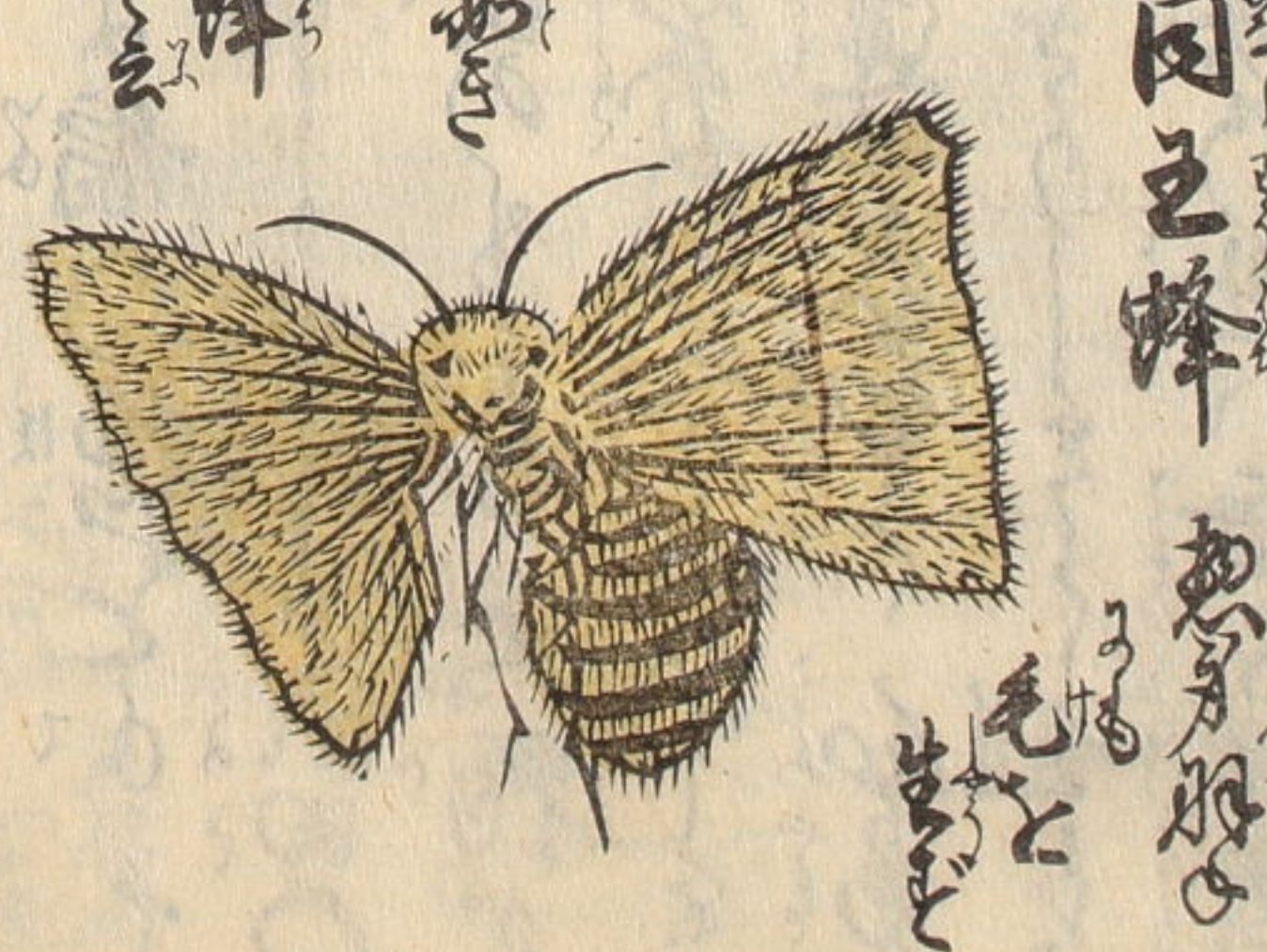
天物、  
 文化、  
 以者、  
 先自、



又村画

海居る故危急の 叔まきまきく 行る肉の指の穂とよそ  
 揺せらまきくわが 救ゆるもが痛く悲しくとよそ  
 出来の悪妻のも河の田の出来の悪妻のもよそ天物が  
 我ふとよそにのませ 故うねよ出来の悪妻のこよひと  
 叔村のよそた達のハ近隣の事よそよ違ゆ急む 急  
 のりよそ是ホの世僕中よそハ安んずりよそよ  
 おもむよそ右の通り之三年の間の天物異乃吐ハ世々孫  
 事乃よそよあまよそよあり多し  
 天物の事ハよそよあまよそよ  
 けく世一の巻よそよあまよそよ  
 にお蜂の酒并へぼ蜂の飯の事  
 附蜂記の事  
 養濃の國郡と郡よにち蜂を云る原野よ元を場  
 ける蜂よそよ尋たの蜂よりハちひよそよ網籠るの

大指蜂の大ききもの黒く多し大さ形状まじり色の西き  
 蜂のりより一は蜂の元と似て二尺位のも蜂のり  
 蜂とめける灰吹のてくるる壺と蜂の巣のりよりなる  
 りのもの一掃へて中のところを漆と能く塗ると一水  
 漏れぬなりなり中へある成花の露と似て乳来りて  
 入る一壺よあること又  
 其の物もこのよりして蓋と  
 掃へて蜂の壺又その  
 其のりに貴いもの掃ゆること  
 あり多きものに掃ゆる  
 こと十ラ位ものものり  
 に入るる露と人なり



ニチ蜂

目玉蜂

惣方蜂

蜂のり  
 蜂のり  
 蜂のり


毛と  
 毛と

はち酒連飲んぐ音事と  
 倫のりものなる事と  
 ともく味あつりて一閑  
 養く窮く古味淋のり  
 とも酒吾指はり七八分  
 一壺中と百文程り買  
 食と珍壺も造化自然  
 まこれ事なるも支と  
 感ざるにとも餘り事  
 免作の石と竹も豊年  
 地路のり強く其も南  
 とも味あつりて一閑  
 養く窮く古味淋のり  
 とも酒吾指はり七八分  
 一壺中と百文程り買  
 食と珍壺も造化自然  
 まこれ事なるも支と  
 感ざるにとも餘り事  
 免作の石と竹も豊年  
 地路のり強く其も南

或は下の難儀はとまゝに願ひあらぬのには爲る族  
多し蜂り若りぬる事之を蜂の用とまゝと作  
るものも居るごとく事なるも如何に王の蝶の  
卵も身をも卵をも細く毛とまゝ居るも前  
より産むる卵なりものごとく蜂の丸は正居る  
般是居るなりと曰り五六は居る多きと十は居る  
り其王の宮を襲ふも出さるる故蝶蜂が  
り来るまゝとまゝも一室もあつて卵も  
を宮を妬りて蜂たりの来る故側は蜂を悉く焼  
捨る者三人居るなりと曰も福成の事と我  
ちりてまゝハ私領の中へ入る蟻時を焼難とゆふと  
を此蜂を蟻とて痛むゆるやうに尋常の蜂の

蟻も痛む程なりとまゝに中多し焼時ハも二子も焼  
殺す事と我花の落るはよ命と来る居る同は卵の  
もの脇の下のふり付来り澤山の卵ハ豆粒程づ  
付来りもまゝ一の蝶蜂も時花と卵と出るとえ来  
る蜂ハ捉ふ愛そのふり多し群り居るものも  
多し乃に収むる花と卵とのハ巢と造るごとく巢と造るもの  
花とまゝも時入替りて其夜とひむ中よ  
黒き性の遠ひたる強き蜂十中多し是と去信細  
く人々唱へは蜂園守の園と守りかめ又換非遠使の  
人と花とまゝも丸の口と守りて丸蜂の出入と換め  
着花と持来りて丸も入るものもバサの  
悔息と責りて入事と作らむとまゝと尋常の若ハ遊



秋  


蟻教一軍令を納ふ異の... 大王と云く  
 大王は蜂王と云く其の巻と擣へくは... 黒糖  
 の原は必右の巻の... 龍口の扁直... 君と  
 守護するものに似たり王の子をせ... 王と成る  
 えより花と云く... 毎日群蜂花と云く... 王に供を  
 け玉一棟は正... の... 雄雄をその  
 回... 道理は... 弁異成事... 王も時  
 控り... 餘の... 雄雄... 蟻人...  
 産もや量る... 群蜂... 使侍... 事... 玉體  
 向... 種... の作法... 岐... 委...  
 山海... 蜂... 条... 洋... 蜂...  
 散... 思... 同...

鹿と鹿者山と見... 金と擣む者... 見...  
 右流乃... 竹分山中... 丸事... 社... 社...  
 見極... 人... 知... 疎...  
 又へボ蜂... 巻... 丸...  
 小... 薄... 紋...  
 虫... 蜂... 幸... 蜂...  
 完... 丸... 蜂...  
 形... 傘... 丸... 丸...  
 袋... 丸... 丸...  
 その... 丸... 丸...  
 伝別... 丸... 丸...



へボ蜂

蜂の子





け降も焼敷せしうりに空と垢整く件乃菓と元菓  
 中よとわの向と餅担のあまこ子とろく醬油と味と  
 はけ飯と替く煮くうの中へく飯くうく是と  
 へぼめくくく味者たくと食意するものうてむく  
 けび食する事く之風味ハ油多うく香くく甚  
 うまきこののくく海と名古をうくうり煮く  
 くのいき味あまきく海食ひあうくも多くく予も  
 食法くもく信別人や義濃人のけびく食する種乃  
 風味くくうく海糖炙り小瓶のく味ひく海淡  
 のんきけく食くくものよらくも義濃乃固形よ  
 うくも垢多く煮汁く酒の者くせくもまじり  
 飯くくくく煮くも蜂飯くく事もけりく

丸形とくくは降の事ハへぼ降と写るく山  
 くくくくく事くく垢多め事  
 ぬやハ里にのく後くく粉の事とあくくハ  
 の粉もあまきく煮く右色のくくくは  
 書記一色のは降ハ江戸も名古屋も垢多降く  
 既右形とのハ播磨の江戸吉山別荘乃園中く  
 垢多く食くく云者もくくお右形と色の者  
 どものは降と垢く月のは日ハ垢事と菓子大く  
 雛と垢多の垢くくつきハ降乃菓完一色ハ  
 店く者く白くく白くくも垢ハ菓ハ煮く  
 成店くくも事くく月く味に菓くく成  
 蓋もぬえ九月ハゆくく七蓋極も成店くくも



飛來りく又二舉に花形も金一軍令もあつて版より  
一攻く一黨とつとつと降記も云も是より比へる事  
むかひ成りけり新降記も云も是より比へる事  
云俗の世より七又の世より八山中へ降記も  
時を中道も一里もつり集りて住居向の故是地  
懐拂ふ事と云ふいへる事と云ふ事と云ふ事  
ゆり七又八本曾義濃より源山へも折良行あり  
人あり

馬の言云ふ事

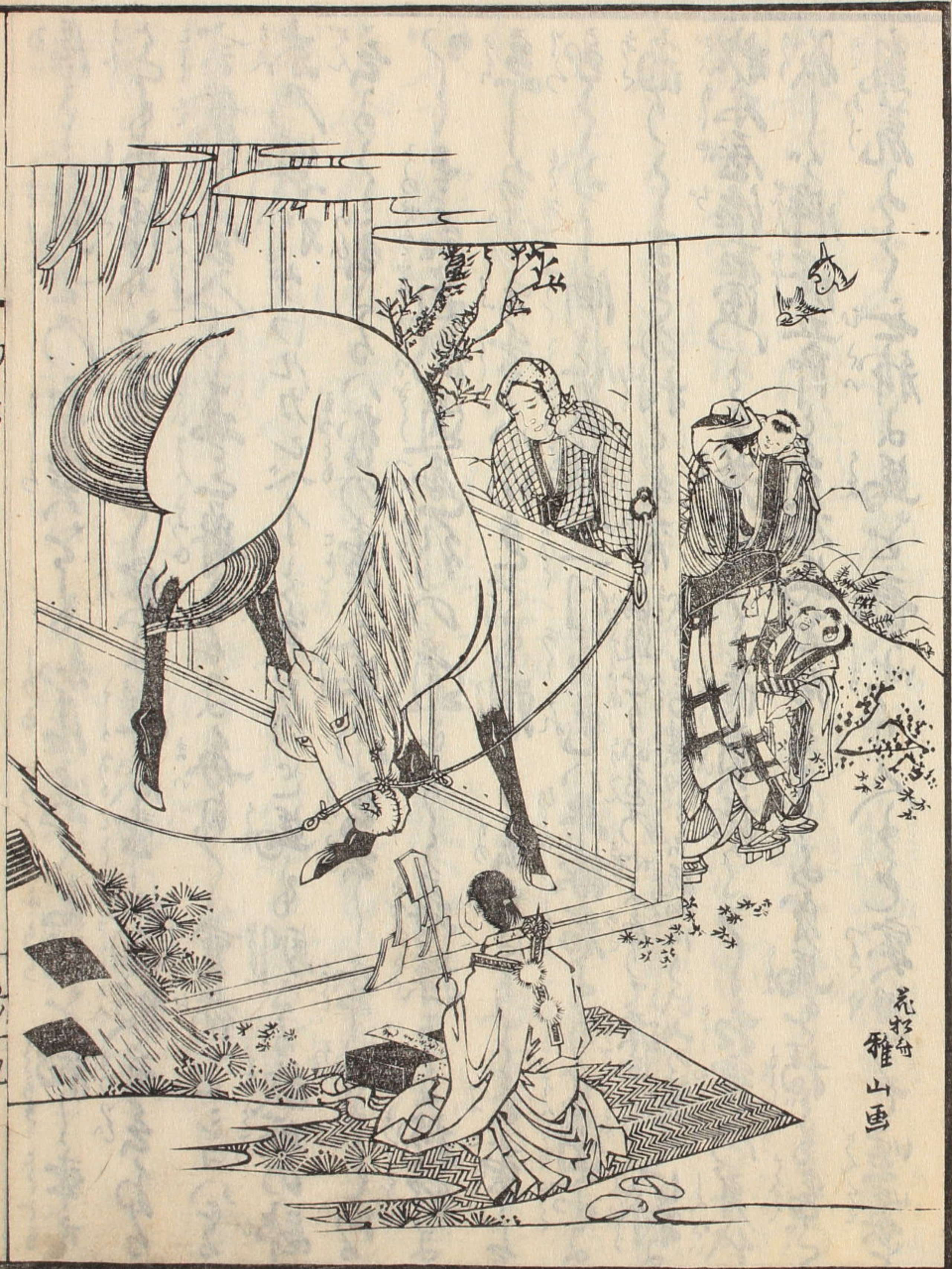
天保九年四月八日の事より東海道を澤宿の馬  
平塚宿へあつと付行り折良平塚の馬掛は  
付誠よりせり大破の方へ登りありは同もけい

坂と云ふは平塚の事なり向より大破宿の権吉と  
り者の持馬前と付抱の馬士牽來り故前物と習合  
物束り付整へたりと云ふ事なり道中より馬の  
大破より付整へたり馬の前も重き故前物の馬士  
乃まねは折前物も重き故前物の馬士  
我々が馬を付整へたりと云ふ事なり大破の馬士  
未嘗にさる事なり彼権吉の馬人の世より云ふ  
各自に重荷と背負ふ事なり末の眞利がりる者も  
云ふ事なり外は安居する者も  
微り驚き忽ち其世に在る宿中より安んずる者  
乃馬士が馬と世道成事なりと云ふ事なり彼馬士も  
り伏す事なり夜迄電せり

馬士其の悪者より常々書の内容より重荷と堪へず馬  
二匹より八十枚と一匹の甘くけい白も前書いたを  
小いさき故藤澤の馬士八目方多し事と云くは驚  
物本とせしつども二匹ぬりり貫目故はさきと云  
かゝる云ふあり権者の馬の良馬も一匹の價ひもま  
金うら米もく文もく八十貫目位の行と事共  
物も百貫目位もはつ附ら鹿毛の七寸を良馬とぞ  
物とぞも物おのれ貫目の定りもさき物と云はぬ  
有事あると云く此道もさし利へ主人つち一疋分の  
賃法と出し跡り一疋分の賃と云くの儀あり  
此の事よのれまの捨一故の事なり建馬方仲由  
のこも甚く悪く勿論安んぬくも馬士と思ふは

なりり一昔京方の公方義徳に別り粟を給あり  
の里の陣と云らき交りしは病馬重らせのひ徳  
元年三月廿六日は死する其前の夜十四回の馬をり  
を産むる馬の中より二回の馬をよつるごとくする草毛  
の馬をちよりのぬくものさき今一付りぬぞやと云り  
又隣河原毛の馬を合せしはさきやと云  
もさき前より馬九共産居り中間小者多し居り  
くつ皆毛と云ふは馬共のもの云々の事新ひは  
此の毛のさきと云ふは悪者と云ふは次の日将  
義徳と云ふは一隊り不忠の事と云ふは  
一隊は目もさき文面は相子も徳の事と云ふは思ひ居  
る色どもさき昔居りし成るるは新今目前より人受

ともハ故安事故妻安記  
 色ハ平ハ故年上京せん  
 月ハ百ハ後足  
 翌九日空ハ破翁と通り也  
 一ハ活と破とモ将十日の早朝  
 予ハ前物と  
 付ハ馬士ハ小田系者の子  
 女ハ者ハ一ハ者ハ  
 昨日の馬の世と受ハ故産實物  
 行ハワシハ大破者  
 まハ一ハ権者方ハ行ハ見  
 入ハありハ早馬を  
 運ハと後法平ありハ祈  
 行ハ店ハ中ハ馬ハ云  
 事ハ出来ハ一ハ道ハ一ハ  
 思事ハ一ハ思ハ  
 捨ハ一ハ故馬預親音柳  
 馬ハ成勢ハ一ハ一ハ  
 作ハ一ハ我ハ一ハ破ハ一ハ  
 せハ一ハ存ハ一ハ奥ハ  
 活ハ一ハありハ一ハ一ハ  
 権者ハ一ハ馬士ハ一ハ  
 年ハ一ハ一ハ一ハ



花抄 雅山画

居る右馬士の言葉とも知居るは持と働一事を  
とも物作りとあり〜其は佳成事之被彼云云あり  
言葉と会入〜再と得るは毎日〜重荷とシヨハ  
末の真別がワルカベト云云〜馬も別なる故取の部  
云〜云〜云〜云の事之馬の云云〜事外と云  
〜云〜云〜云〜云の道と云〜得探る〜枕林  
〜云〜云〜云〜云の事ハ何れも現〜云云〜云云  
〜云〜云〜漸に成候今〜云云ハ平塚君のりも道中  
あり〜云云の村〜云云有 海道よりいさゝかありて東西各一村  
成りし言葉ありて山ありて山の麓に  
枕林を治る候〜云云者多〜高賣物〜お意の月代  
成〜片渡五郎と云者馬と好〜云云馬と持もも  
乳荒〜云云種馬と責叱り人〜云云突然して喧嘩と

好〜云云と云云〜鹿毛の〜法馬と似〜云云  
光母の夜〜頂〜云云〜鹿の前と云〜云云  
馬の言葉と教〜拍毎〜重荷と付〜云云  
〜云云〜馬〜云云〜故荷の重〜事ハ又拍大候  
〜云云〜云云〜家の子の乳荒〜日〜夜と  
り〜云云〜云云〜鹿毛の〜云云〜毎〜云云  
〜云云〜故〜馬〜云云〜鹿毛〜拍大候〜事と  
〜云云〜馬と事〜云云〜云云〜昔原君の馬士  
谷五郎〜云云の〜云云〜谷五郎の初め夜は君は居  
〜云云〜云云〜友達〜云云〜馬の〜云云〜後五郎ハ  
〜云云〜馬〜云云〜事〜云云〜馬の腹と云云  
〜云云〜鹿毛〜云云〜一駄〜云云〜云云〜時〜云云

二匹ぬりも付る故馬のトセし物いをも極乃事之連  
右近の事能知居し世せりまご文政七八年以よと別  
大浦郡吉柳村 館林領くく因わう 七左衛門の持馬赤鹿毛の  
云云このと云世し一五年史重くも前生乃事おと  
尔し余の面命する事ありまご首尾もりて連  
せざと虚実(女)ひつと故書載兼りり形よく探り尋  
重後とのと砂り多し高類のくも程くもまご  
物程はうくま云又川童も能く活とう一猫俣の類も能  
く活とう一く人と遊らうまごの成が馬乃云云このハ  
用くと物事事と思りり又云前改年中の事よや  
東海道坂の下宿乃馬土山の宿へ行く泊り一夜食  
とりくぐらむと豊朝鈴鹿乃坂と牽りりある時馬乃

言云たるよはくさのふ相場死脚乃重荷と附く強党り  
しよりハわら荷のくもくも腹のくもくも若事と  
云ありとの事風一因居りまより馬がその云鈴鹿  
乃愛がと云馬土噴出来く今には噴を諸國く汎  
事之のくも成年也乃乃事ハ坂の下又ハ鈴鹿よて  
馬土其よ尋の探るに馬乃その云くると云事ハ水くも  
ゆゆ其馬がその云鈴鹿の愛でもま女席あうのせくゆこ  
とゆあままま馬乃云云事もま一も云云或ハ後  
馬がけ島くその中たと見えまるとま故竹とり  
せしと尋るにたま女席あうのせくゆゆゆた見  
えく物よと汎ひまもるのど堂くまち地ゆきて  
尋るに一向り兼隆とま一ゆ一敷許奇狭味活の

類も十二八九を八九面ざる事多し又面をこせり虚  
 多々もバ此の如く書記の事多し百捨多し其も怪  
 成事乃とと撰く事多し其も怪  
 馬の事多し事ハお遠る事多し思ひる事多し其も怪  
 あり多し  
 又因果物語り武州赤松川より藤入君と云く南津  
 けふ故事多し乃羽織と笠と著く物と云く又圖書  
 事多し乃羽織たり何進多し物と云く又圖書  
 江別りて或家(遠人)入る物と云く出んと云く  
 馬進多し事多し其も怪  
 皆同日の疾なり  
 程の事多しお対死と云くたふ事

尾張の國豊田を井戸村 東海道宮宿より 百姓の娘ふふと  
 女多し生は月持悪友後逆は宮宿乃内築出一町  
 御道船東乃婿 松原(出る)あり 迎初多し扇を云く旅籠屋は飯盛  
 女多し船りて船店芝敷 船屋中村秋右衛門 異名多し逆多し  
 ても誰多しぬ者多し云く漏丸放蕩するものなり  
 因不髪結乃抱の者多し竹多し云男多し云人多し一匹  
 此男多し思ひ合へば或日今夜中半  
 考へ事多し約束と云せしもの哉と思ひつるその夜  
 約束乃時刻もなる頃と云く八竹の事多し思ひ酒多し  
 忘まがて一川なる女多し今御多し待候多し



身も畏れも事よふかゝりまの約束の場所(尋ね)  
持の上もくも南もせむとやと思案と極めかの約束  
場所(田村) 葉中(町) 秋葉の森(行)見らるる毎の  
伏(た)もたし(さ)もま(ま)切(り)もあ(ま)り(来)り(せ)ぬ  
ま(ま)と(母)か(よ)九(つ)比(ま)ぐ(八)居(る)も(ま)ま(り)居(る)も(ま)  
し(き)尋(ね)ぬ(る)案(中)之(そ)外(外)近(き)う(ま)是(を)尋(ね)ま(ま)毎(の)  
り(り)不(定)な(ま)志(を)驚(か)す(ま)不(審)り(思)ひ(な)ぐ(せん)ま(ま)  
た(ま)く(ま)夜(夜)の(ま)切(り)も(ま)あ(ま)り(り)と(相)毎(毎)に(ま)九(つ)時(時)と  
お(お)く(約束)の(ま)田(村)村(村)葉(葉)の(森)へ(行)く(見)ら(る)よ(の)り  
男(も)来(り)居(る)何(の)と(ま)ひ(り)も(ま)又(又)三(三)丁(丁)先(先)に(居)る(ま)  
衆(と)ま(ま)葉(葉)乃(乃)古(古)木(木)敷(敷)く(ま)色(り)も(ま)お(お)も(ま)り(り)  
恐(お)ら(る)衆(衆)を(ま)い(り)の(男)と(二)人(人)に(り)漸(ま)夜(夜)も(海)ま(ま)んと

ま(ま)る(頂)よ(及び)道(の)端(端)の(枝)の(根)の(木)の(六)尺(尺)中(中)より  
五(つ)膝(膝)六(つ)膝(膝)あり(る)枝(の)腰(帯)と(り)ま(ま)の(お)お(お)り  
持(の)の(ま)端(端)の(ま)あ(ま)人(人)一(一)段(段)の(首)を(懸)り(て) 色(色)と(色)の(色)法(法)は(は)  
死(ま)ん(な)あ(ま)ら(る)ま(ま)の(行)成(成)事(事)を(男)の(心)に(懸)る(ま)木(の)  
股(股)連(連)たり(り)女(の)童(童)と(ま)ま(ま)の(ま)地(地)に(付)る(ま)ま  
死(ま)ん(な)ま(ま)ま(ま)も(死)の(ま)ま(ま)ま(ま)や(ま)ま(ま)の(ま)や(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)  
思(お)し(折)り(る)早(早)也(也)も(海)波(波)り(懸)る(隣)村(村)清(清)美(美)村(村) 津(津)道(道)橋(橋)  
の(者)を(り)懸(懸)る(ま)粹(粹)と(見)る(ま)大(大)な(ま)驚(驚)る(ま)能(能)く(ま)る(ま)  
女(の)妹(妹)の(女)る(ま)も(行)端(端)は(懸)死(死)く(居)る(ま)八(八)幡(幡)乃(乃)  
程(程)の(り)人(人)の(八)幡(幡)乃(乃)名(名)本(本)の(股)を(拘)り(る)色(り)と(首)を  
本(本)の(股)を(拘)り(る)死(死)居(居)る(女)の(ま)切(り)は(助)命(命)か(ま)り  
ま(ま)ま(ま)ま(ま)の(ま)又(又)ま(ま)ま(ま)と(ま)ま(ま)後(後)考(考)た(た)か



程化

五ノ二十四



長  
壽  
寺  
氏  
印





御所より右の石と磬とあり多し一色の石の  
 影を照りしるもの風風強引も遊々たるもの  
 左も右も事々今頃意ある所の井家より用  
 可の磬は皆悉く洞磬の石磬と用ひる事あり  
 彫琢の妙は尋常よりざる故に乎中年の頃まで  
 繁華より用ひる磬と石の事とありて磬と  
 りよ洞の石の梅へあかぬと磬の字を金  
 匠もどしあふ匠の金と石とを遠くあ  
 どの好むものかあひ居りて一和あるもの  
 を一何事もあはれ事なりとあはれはり  
 思ふまじせし一岡にありて記し置て置  
 承えし思ふもの



面

磬石

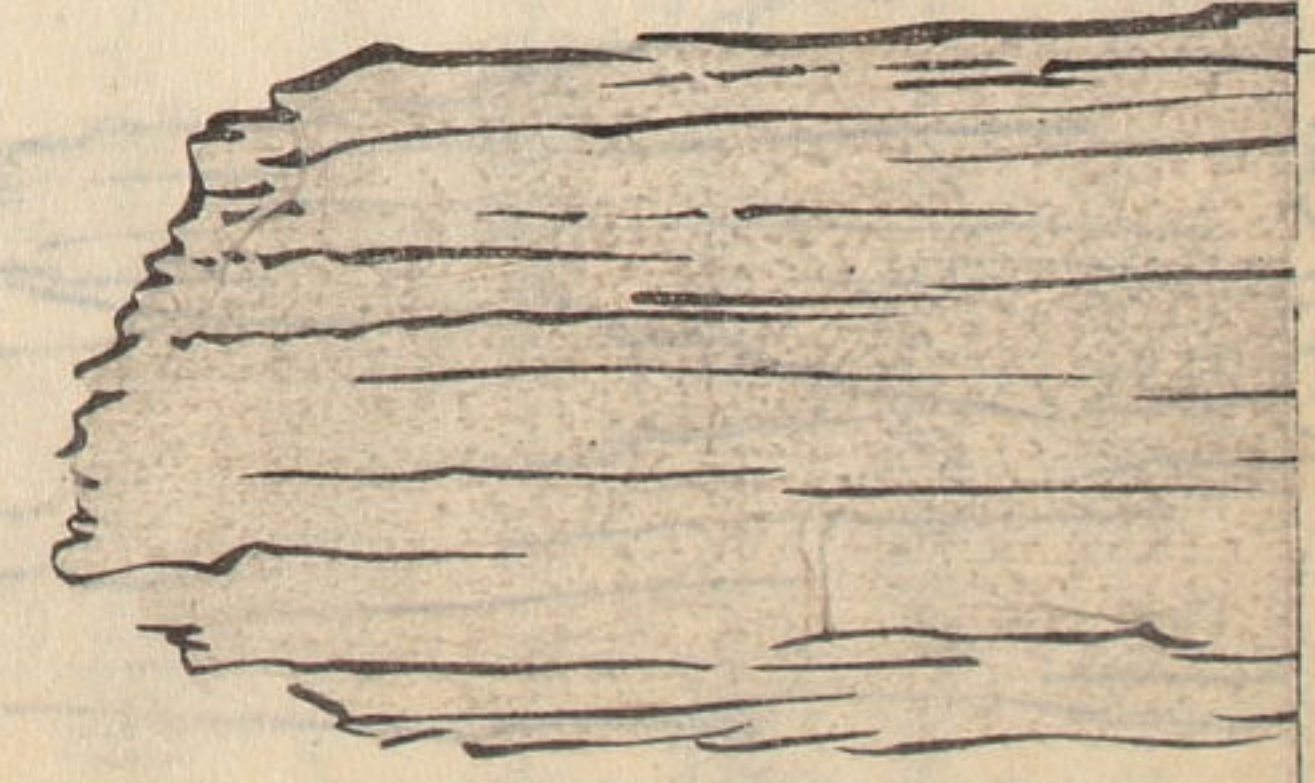
横

淡筆家細川  
 林谷奇石と好  
 磬石教書とを  
 一品とま字  
 う  
 並

石質も大同  
 小異あり  
 音も又煙々  
 うらうらぶき  
 全淡の音  
 あり



裏



平が友肉藤廣庭は石と一川取持なり居きり  
 う根成石之文と白目形は灰崩りあり  
 石肌荒く麻の〜〜〜殺れりまきとも欠けハ  
 如竹〜とま急〜〜磨けを輪文塗ら〜〜成り  
 お遠〜は石片向の端の而よ少〜欠底をい底の方と



下にあり物〜〜おと鳥と又底の方とよ〜〜て物  
 先延〜〜に近〜音あり  
 或人云磨去〜と種〜の礫石を奉〜と〜瀛州の  
 青石礫其長一丈餘と奉鴻毛の如〜と云奉者と  
 見〜ハ〜音も煙〜〜〜淡州の石炭ハ〜と  
 たる色ハ其音金玉よ近〜彼楊貴妃の身せ〜區回乃  
 従玉礫〜の類なり〜  
 蛇貝は觀世音菩薩現〜居の事  
 武藏の四蔭原於大井村東邊寺  
 觀世音菩薩の像現〜居の事  
 良縁〜〜天保十五年甲辰四月廿日思ひ〜の地よ

初く右の像と書写り来りしとたよ書一並ぬす  
来由ハ安房の徳士如琴翁の悲し記せし文をける故  
是とも及ん死し無後今さう云ふ及ん

海中出現觀世音像記

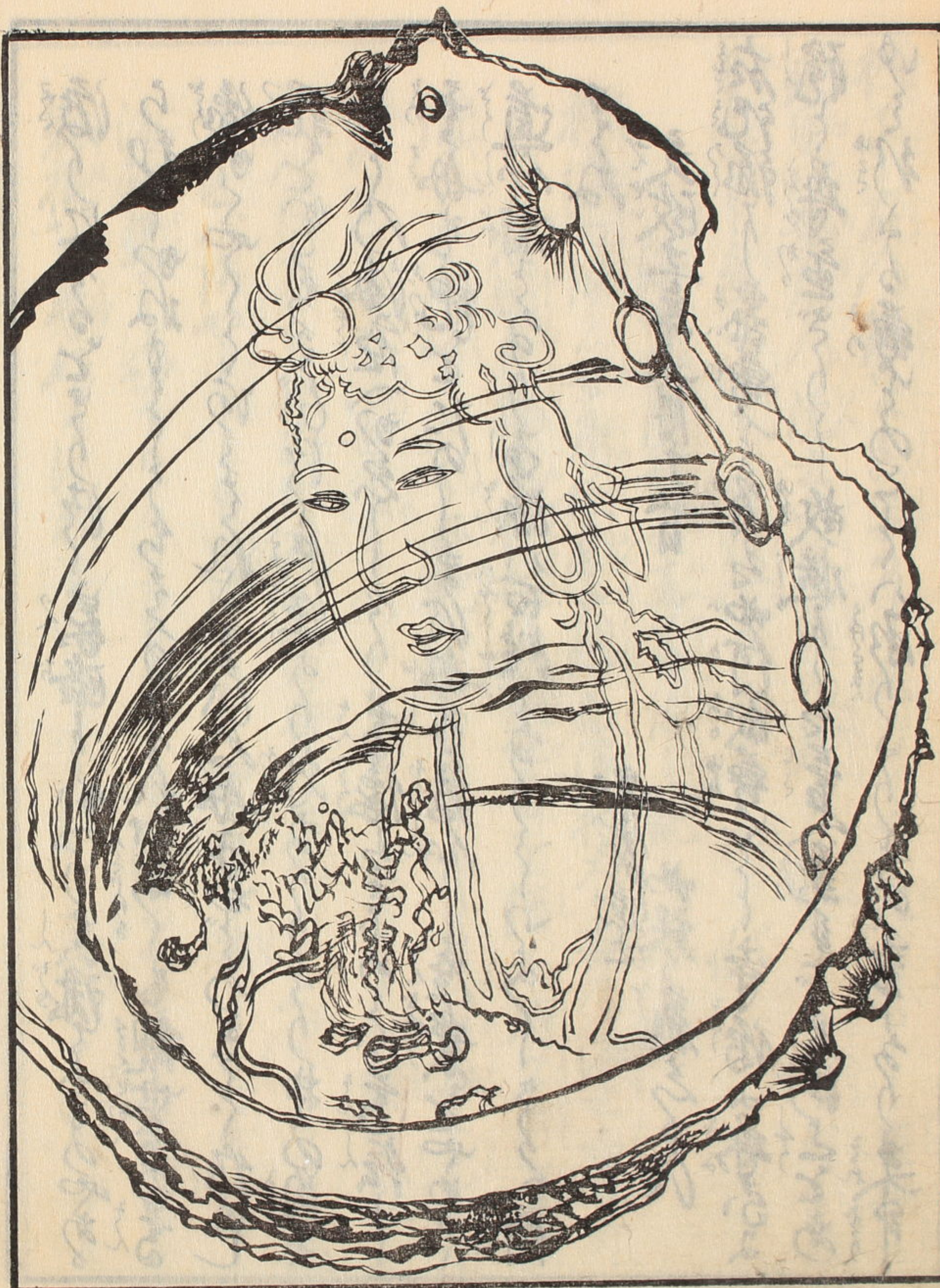
抑は言像ハ安房國朝妻郡白濱村大首の海士市五郎  
と名付同邑福聚禪林の觀世音と信し朝夕奉と撰び  
詣ぐらる御に母能とたりたもくも色ハ白ぬと云  
おの色も又浮世波りのうもぐとさうぬ時ハ文政十一年  
秋八月十七日夜不思の靈夢と夢りてくべく凡俗  
も色ハ白ぬやしも思ほへむ野海が傍よまろそはるよ  
海面珠りしりりくるさきも波らるとさうりりして  
岩根と舟ぬりに急ものさうりりし能く山のせり

波りにくるさうりりし家路のつりま珠よものやあ  
らむしぬぬさうりりさうりりさうりりさうりりさうりり  
像のやうさうりりさうりりさうりりさうりりさうりり  
罪とあさうりりさうりりさうりりさうりりさうりり  
さうりりさうりりさうりりさうりりさうりりさうりり  
さうりりさうりりさうりりさうりりさうりりさうりり  
道心者さうりり子孫ハ百姓さうりりさうりりさうりり侍  
さうりり

文政十一年二月十日

安房の徳士 如琴翁の記

左記海に靈夢と有る如行成夢と寺僧よ舟よ  
院と舟と並ざりし教達と云ふ善きも海とあ  
ゆも初る夢とのさうりりさうりりさうりりさうりり



貝乃大き

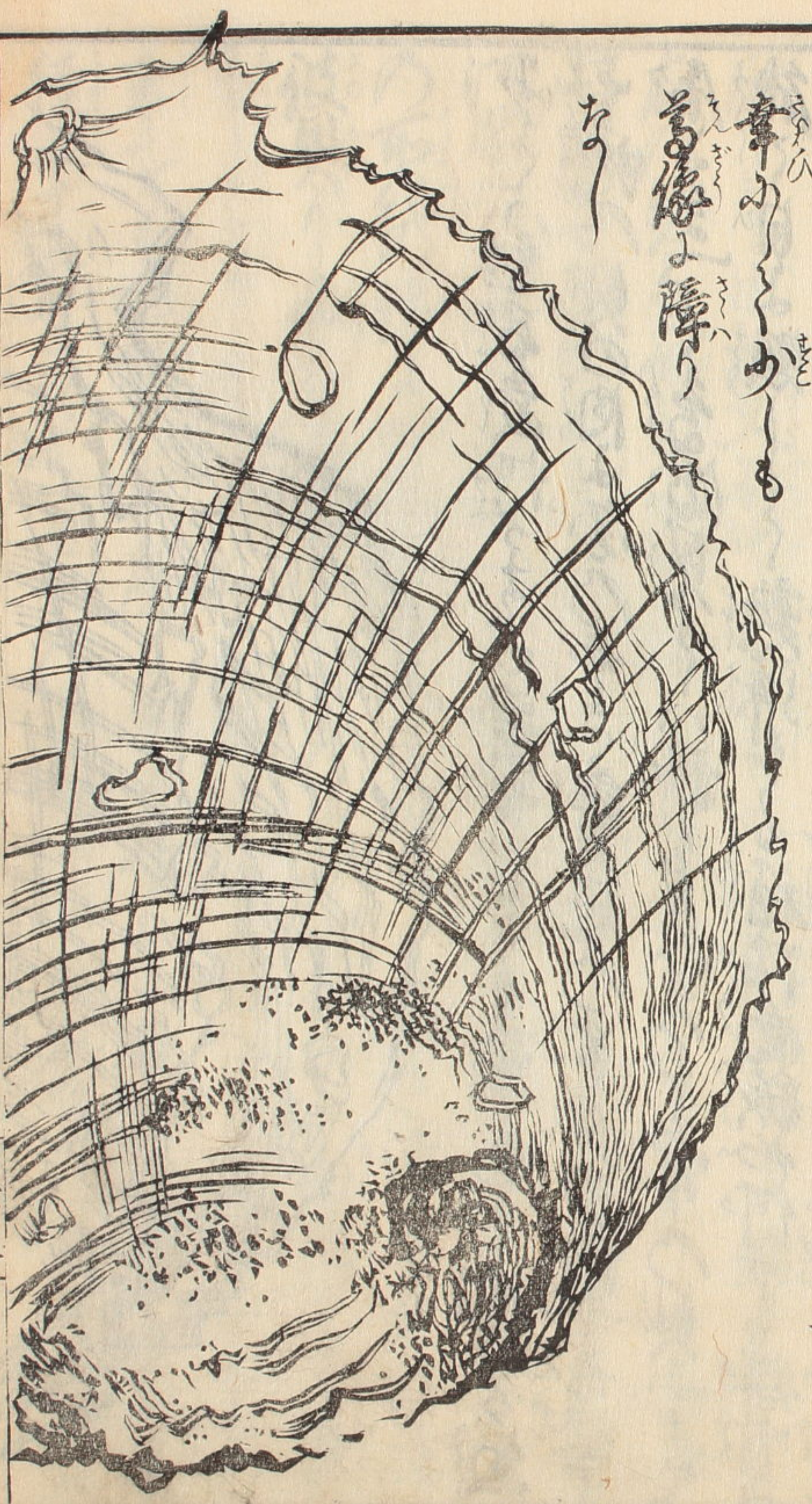
はなりのよ

あつちの地さう縁の石雲のぞく欠換

章の

善徳

ち



地観音

五ノ三十



ありてある愛行うまぐ聖者なる事なく思ひぬ  
 聖地の日月よあつたる寶冠のすみの親世者  
 居たまへど高波見く一初も見えざる常の貝ふして  
 能く日は照く懸浮する種法面額如行のも鮮明よ  
 一一生少の如く葉舞の陸地まことなる凡の名画之  
 画の可僅美濃紙二枚他も言く成居るも瞬もせ  
 篤と相見えざる其は赫耀く一鮮之は貝彼氏



家りて後とるの事には牛込葉去八橋宮乃別白言  
 安生とく救金と購ひくはらまことふあの中なり  
 玄量寺ハ浪居く一念佛院と云くは寺に果居成  
 居るは相又中明林寺乃常行房予よ緒く  
 右の貝とるむは靈験とく安及び居ひく一由居  
 正月十七日夜よ少由海路次あまはま同十八日大所  
 河原乃天作一糸指す一東運寺にもまきあ来りよ東運寺  
 の西化の活よ回冬以来之くむたう乾き強き故に  
 彼貝りぬとるせよまきあふ少く一由居るも  
 事とも西化其常房と云よ尋らよ日く新念して親書  
 經年三巻は一七日乃内漬酒紋一及び是也而海山

海中に生ずるもの故を云々を靈驗物語と奉と存  
との言放たりり、列は水天の法をどハ終せらまむと  
流りて母に付も外の法ハ終ハ中々も  
必七日の内よむを流りての言を余の奉共とも  
祈念を云々も同リ一夜も祈念せし奉りとの  
事故存り大病人等半瘥の事と祈念なりたまり  
急が靈驗ハ云々も勸めありり安齋隨筆云云  
池上本門寺ノ僧来テ談話ノ序ニ本門寺ニ蛇具ニ南無妙  
法蓮華經ノ文字現タルアリ貴キ事也ト云予聞テツレハ  
細工物也予作テ見スベシトテ作り置テ他日僧来リニ  
見セタリキ其製法ハ蛇具ニ佛像ニテモ佛名ニテモ生  
漆ルシメウヲ以テ書テ蛇ノ穴ヲ蠟ニテ塞ギ漆ヲヨクカラシ

テ酢ヲ十分ニ入テ二十日程置テ叔酢ヲ砂ヲ以テ能磨ケ  
ハ漆ノ付タル所高クアラハル、也是無益ノ戯ナレドモ如此  
事モシリ置ハ僧ナドニ訛サル、事ナシ奇妙不思議ハ皆  
造事ナリト云りやも漆めく書蘭屏へ取と入へ爾  
〜文彩と造る事々々々々知居る事々々々々もい親言  
ノ事々々々々〜疑と生じ兼りり奇妙不思議ハ皆造  
事也との云りや〜殿りり七の巻は記〜河分大神宮ノ  
文字本中ハ出現の事ハ本の漆〜出来たる人信と  
あ〜てと記巻は記〜並りり終本明神ノ奇異九の巻は  
記〜河分を信國所乃靈驗本本の事ハ造り奉り  
あ〜〜〜今眼前ハ九人の見〜知る〜の奇妙  
不思議あり九例も色改り並りり〜美〜結〜



唐に平が下男幸彦の家國宅知致戸田村のとのりるが  
 右村々々ハ割と毎々蟹と成事うう成想りも折々  
 見ありて珍奇ううと云放萬と安又割の蛇と佩る  
 ありに肉細長く出くす出くる肉は色生く是も成やえ  
 蛇と脱く〜家と成びつる蟹と成り〜又右幸彦の  
 親なるもの云ハ蟹捲盤遊うも長油花と成そのぞ  
 心と付く見金〜と示さき〜も幸彦ハ一夜も見  
 たり〜と〜の莊子の道遠遊〜親化〜鵬〜成その  
 事も偶云〜も云が〜造化の  
 ぬハ人智の乃ぶ事〜又〜は是も  
 幸彦の見つる変化想りの姿と  
 目人よ安行〜馬〜並ぬ想〜



虫鳥の類の變化の事ハ本草総目ニ云鳥類ホリと  
 種々の變化の事見えたり〜月或人の筆化〜下総の  
 國香取乃浦ハ鴨〜に瀬澤山〜所〜縞と云魚の化  
 あふの〜鴨人の〜縞の縞〜す〜もの〜縞も  
 ち〜云又蟹も世取り多〜鴨〜云鳥〜成〜事ハ  
 蟹も〜ハ鴨なるも〜〜〜ハ縞と云ハ海狸の事  
 〜〜海狸ハ〜〜〜縞〜〜成〜ハ云信も云信  
 少〜事〜〜海狸ハ油狀〜〜縞〜〜云遠〜  
 そのあり程〜地〜赤〜任〜人の安〜縞の胡蝶  
 變〜無〜成ハ折〜溪人の洞〜も入事〜事〜も成  
 敵〜老〜〜〜捕〜事〜の言故〜變〜無ハ  
 也行成〜の〜〜母〜母常乃縞の縞〜下〜毛

生出一一 麟の回より毛羽を居るまゝの生起り  
たるや願うもの胡蝶は変り居るに随て見ゆべき毎  
右の赤丸浦の色よりそい居るに随て麟の下は毛生  
しつゝ後、後場而と改る事と見えたりとせし  
且蟹の鳴よ成然りも一夜も見えざるにやせし  
そ去の光溪よ出ると侍り委實に一並にと思ふ  
うもと云ハ厥の事かと思つる具も造化の妙も  
人智の及ぶ事よ此ぞ

孫道玄猪と截つる事

孫道玄の信別小孫弘小泉村に小泉の右邊の乃男あり  
中年より江戸へ出ておのり留業と認め人よおのり  
頃より平知己とありけり人の美藝も人よ長出と

ちるんげり武藝と好むに似れ其術等技藝もくは年の  
頃より國中不くと周遊し一と先づの武藝の作と作  
がもも致せしき一と一と國國保家なるを領の肉  
約が嶽の色なる山をこぞ遊りて所乾せしよは所を  
僅の平地もく人をも漸にすれり田畑より  
皆山嶽と業し一と外山嶽のよと波世しよは不  
ありし武時道玄の云く各達に猪と稱するは深  
おあそ一夜目おはたものこくをこくよあそこの  
とと先生とほき切り河に遊將と稱せたりとせし  
と長たか者のかつる時を悪あまし遊くよ成る  
あつと遊く定居る武時彼者よは後ハ仲春と  
あり猪もさうり出澤山より羣を居るまゝ明白無

自勢の山へ入猪と追集は後に入中ぐりる松共の  
自際りの法懸り四仕備河きうとくも用意と  
未明の食事と志とめて至後六七人の大二丈と共におと  
り山路より入るまご山を雷澤下り妙り居る  
とけ居るまごき海りてあ初も自由のさぐり  
後乃表より出たものとさうく山へ入るの懐の  
少し給るならふ所へ移り先生はけり侍居るより  
我は四方へ分け入るけり猪と追出ち中居る  
澤山より四仕備をへ後めを又けり集り下  
大猪と追出ち猪の吃懸りける時ハ声と合く遊し  
下さるべしななき時之猪の懸りて斃ゆ大い  
乃先達より中ぐり大切の法懸り懸り教へさく

唯き人跡一とく皆ちりくは深山へ分入りぬ猪の  
さうり出ちる時ハ牝猪を是は牡猪二十丈も四丈も付  
纏ひ居る喰合ふは血と流し河きに成り居るも  
一向平澤の松より一羣のりものめけり時ハ彼も  
冬懸り目くも一人とも一向思まきと甚く不歌あり  
居るもの猪形は遠方乃若くは回んくは狭地  
乃着着るこ出ちる肉は谷一川向の方より遠り大乃  
吃る高波のりまは是と見らるは猪十匹並び遊すは  
唯大一丈のくあさりに吃懸り居るを事と思ふ  
間も形は變り見る居る肉は豆腐より何んと懸る  
ゆき雪中忽よりけと成り丈切は声の止まるハ  
猪り懸りまごり相遠ちる僅谷一川向の事なれば

うゝ見ゆきどももその間を過すも猪は天福は見え大を  
猪は見えぬ前故物行もは方うゝ新事成目よ合ふか  
事不使之と思ふうち頻りに鉄炮の音谷くよ書と  
見りて垂傍の谷もりのりこの方へ大猪定たりて  
ひき来るのり毛はうらゝい染よゝい布へ三足来きゝハ  
凌ぎ難むのり一と小きもあゝ電りゝ巖と小楯よ  
死ゝ侍怒ゝもども足場悪補まよ本下の難ゆゑ  
刀あゝハ河ゝるべし刃付ゝ脇差もゝ付面べと刀ハ  
巾着もゝ本の枝よ結付並行の一本よ刃付居行のよ  
扱身と持ゝ侍怒ゝるもろゝ三丈の猪今速り居  
廣場へ来りてらゝひ思り居る故ヲ、イと声と怒つと速  
き足飛揚り来りてらゝ故例へ刃付真向と骨も徹摩よ

碎けのゝ切別は鉄石よお付のゝゝ女死ゝ皮のゝかゝ  
とげ薄も故猪を泳たけのゝゝ再び死怒り来りまゝ又  
目どあどつけおゝ二刀まゝ切別は先乃でゝ女死  
皮のゝとぎゝ落ゝゝも始りゝ二太刀の底ゝ急取の  
痛も故もや猪ハ垂下乃谷へ落ゝゝも思ひ居るゝこの  
二夜目の牙の背けゝ思補腹より胸へけゝ牙よけ  
破らま衣類も怒別ゝゝも負血駁交流も出れ  
中ゝも底とも面も有餘ゝゝも是ハきゝゝぬ事よ  
とらゝ頼も切ゝるゝん乃眼差ゝ骨骨ゝゝ女死  
切別事もあゝも今いゝゝも今と落まゝ一強念の極  
たりのゝ思も薄もろゝ率よ後ひゝ二尺目の猪けゝり  
来りてらゝも今いゝゝりて今夜を心せゝゝかゝ早く

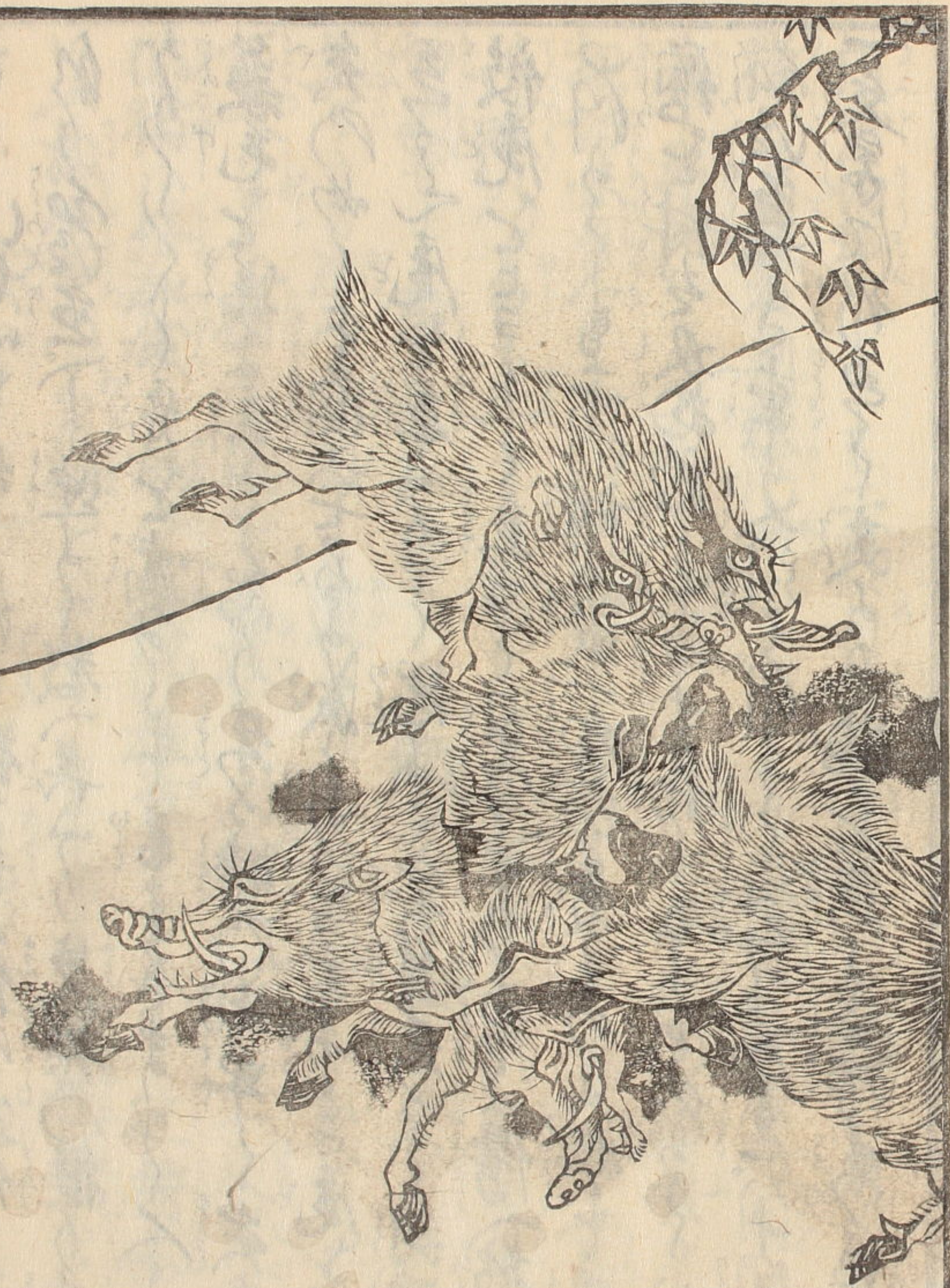
開く切らるまゝ猪の鼻の先と切落しうり幸ひり  
鼻を割くは急なるまじがの疵のくも厚皮を傷む  
ゆゑに肉の通りも是も谷へ落し先のも皮と二疋  
うめさしり又引張るまゝ今疋の猪種り来りしり  
而して向と切し又先のくも又落し切割兼べし今  
度とまゝと落しと骨と背けし前疋と二本とも  
切落せし故是も垂下り谷間へ落し今疋うめさし  
たるまゝまゝはまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと  
飛揚り来る勢もあや故漸く先は肉と皮ともつご  
たきども何れか小まゝと山の後めし行はし本は骨  
行もまゝハ振身と持店進運も自中より採は先と  
平場へむりし疵はと見えやと先の布下りまゝと  
然

二疋とも垂下り谷間のくも骨とまゝと見ても  
先疋と解ししけらるる布と見るよ本綿の糸入二  
枚と結の細糸まゝなりと利銀も切裂るゆゑに  
細糸もまゝと版のまゝ中より何れもまゝと  
乃まゝ八九寸の皮底より浅きつらつらと骨と  
一故取置後髪懐中へ満ちし由成難くゆゑに  
あゝ能表すまゝのくも結びなり其時の事思ひ合  
漸くさしきと落ししけらるる思ふよ皆の者共我  
池をのりし猪とは布へ追集るまゝと何れもま  
猪炮とおは今よ又は布へ猪多し集り来るべし  
なやりし事と好む遊は敷く勇と争ひせば  
り意のぬ命とまゝは布も一也業の死果る事と



見えたり相と疎念を極うりくく不の簡なる事  
相と頻り又後悔とあり勇まもたもく果く事  
は凄うく受し居るも仕方ありと事分と引連  
先之是と仕置る事事故中決るまけきども頭骨と  
刻るに切兼て之刀を引るに成る外響と切と  
切なるに皆く見せ若き切極之重く来くさせあて  
一丈を胸切り又ハの行り又致度よの今度ハ是場  
の身は取れり口より切割極く思ひく後名と来の  
枝よりけきく待肉は連傍乃山と又大猪十丈と連して  
延行故物何いせまぐと思へども不登くハは取れり  
為り落き命何よりせん一丈も澤山切り切死後名  
矢ひと防がなやと取存と極め不敵よと又右の猪ハ

ヲ、イと髪と髪と忽ち形く速く来りたり  
想つて必過し一丈は跡くはききて義毛と違ふ  
あるおくなり一丈は跡くはききて義毛と違ふ  
かりくくと齒とあり一相ひ来る勢ひ差らるゝ尖り  
とも何と云ふかもう先霜初飛想り来ると交  
能死さうく胸中と其二の切割何のさうさも  
二の切教一より強ひく来るとも又引を引て其の  
毎りよ切教よは快くももう切り是ハ妙成事と  
是よりハ行十丈来るも一付つゝあ切教も極くと  
忽ち心も勇く是ハハ勢いと増く想り来る毎  
細切りく強きハ八丈を切教一より其内よ二丈ハ  
何と云ふと一方と志とありと後よ十丈もむ  
来りく一方より花付来ると左右一勇と背けあり





まご物に討し之は猪ハ生後死せざり侍は昔し  
のし居しと尋り来りし者も素想して未だ死切  
ざらと喉のり裁割皮を刷磨とすり馬の猪も皆  
然りし惣ち皮も元膳もとり出しし同は十六七  
歳成童とすり行らる者も度り来りは神と見え  
し松尾ハ先生とぞ思ひの外大馬鹿成事とすれぞ  
折角教しても竹の皮よ立しと云ふ顔射かハ  
斤腰痛も事之見下け果する先生故に皮中く是  
胸切し故皮の速戻をよきとぬ教とすり扱  
能く圓打も皮ハ添付くはとりても速よる骨折  
ぞんた駈来る猪ハ引組と喰と突く急而故一突もそ  
弱しをまうりに死さぬと速よ先皮と刷磨より

膝もとりて素より肉く骨と生後捨棄事なれ道言が  
秘術と云し流りお前より思ひの外言ふり  
笑のし神は皮は疾と付ぬ松よ事と知しりと  
又の向の山と大が猪ハ喰然りし侍り遠き方  
かカハくしと声と教をりまし速大ハ勢ハ猪ハ  
考りし怪ある事思ひ声をざりしは急怒らた  
しも詮らる事と思ひ声をざりしは急怒らた  
し教をさしししは急怒らた  
残念がり甚ぞ歎きし由大を雄大の向しで用り  
急怒らるもの急怒らるは猪のしし  
肉中の者山ハ八七七八ははり来り支と後世と  
事とぞ猪一丈とれバ皮が二百文計膳が二百文申ま

何の二百文斗とありて於合七百文獲とある事とては  
 七百文と元と極歎と勇と幸ひ日々命がけの勝負  
 のこととては僅の生法と違るともはたしもの事とて  
 事之心國の〜無と捕の〜雷中〜無乃克(薪)とて  
 今〜無と怒とを逆〜長とさる斗の〜捨と日月の  
 痛と突〜仕向の事と若突換〜ぬまの無の雷とて  
 捨の穂先と捨の〜文とさる捨の穂三つとて  
 碎〜たさるハ捕者も怒〜攪と教さる〜の事とて  
 南総が東遊記に〜又化別〜無とあり〜の様と  
 並〜とありて捨のほの地乃下のありと決死して  
 お事〜一おの〜ぬ時ハ早〜とぬ〜おと捨とて  
 損とてハ驚大〜怒〜決死〜とありて様

勿論人とも我製事折よゆ〜ハ事〜の事とて先  
 換とる事ハ一向よなき〜の事周遊者決よ〜金  
 敵中富山清川の火踏ハ斗馬と取合ハ漢舟と渡〜  
 一〜とて〜漢人〜と捕〜樹〜故ハ船中  
 宣森〜侍〜捕獲ハ〜と也船乃〜と  
 然ると目早〜死と〜と切落〜速〜滑  
 事〜事生死一瞬の同〜國の故ハは子乃戦場  
 都〜命と塵埃〜り軽〜忠又我よ〜りて人痛と  
 唯〜一或ハ天下乃暴怒と捨ハ〜とて  
 是一幸よ〜と〜紀伝義光〜死〜とて  
 おの救よ〜と〜の事山海名産會〜見  
 一り皆同日の決〜と〜は〜と後世〜武門

家より生きてもや〜太平の清世よ出云弓八袋太刀を  
鞆の柄とまよ〜英軍風流と奉と〜生煙と  
路ると云ハ忍たぐ〜皆

東照宮の 神徳作も愚成事心は遠く〜

周よ云三山六海一平地〜世界ハ山三下海ら下よ〜  
平地ハ僅成事〜の〜山國ハ生きて山嶺と奉と奉る  
人々野の〜事ハ極愛〜事〜平原都會の  
地〜任ふ人ハ野の〜も信乃働と〜と〜  
心はよも成〜書付〜時道云が友の他  
人も安直且地名英皇乃名又月日おも要安安直  
一夜急〜後ハ何れも思ひ出〜今ハ道云も黄泉の  
客の好〜入ぬまバ舟極も〜と〜踏と組留〜

世ハ〜外集の〜書裁迄〜

右條道云十六歳の時兵々人任別高を〜  
葉山(初連)の村を〜(色)然る〜は花ハは葉の  
徒来(初出)の〜の〜故は〜  
〜と〜達〜而〜た〜竹〜  
後世切〜所産〜竹〜持〜  
根敷是出〜を〜  
事何り〜知り店〜の道云乃死後〜  
〜又常陸の國の何色〜  
野道〜馬よ家来〜浪人の怪〜  
道云履〜馬〜共〜一時〜  
高者事〜は〜

汀をさる月を忽ちあつていりぬきいつりよもさゆり後し  
号しもあつ時とあつまう後津うら成をる夜事し

解籠の女と魚と捕する事

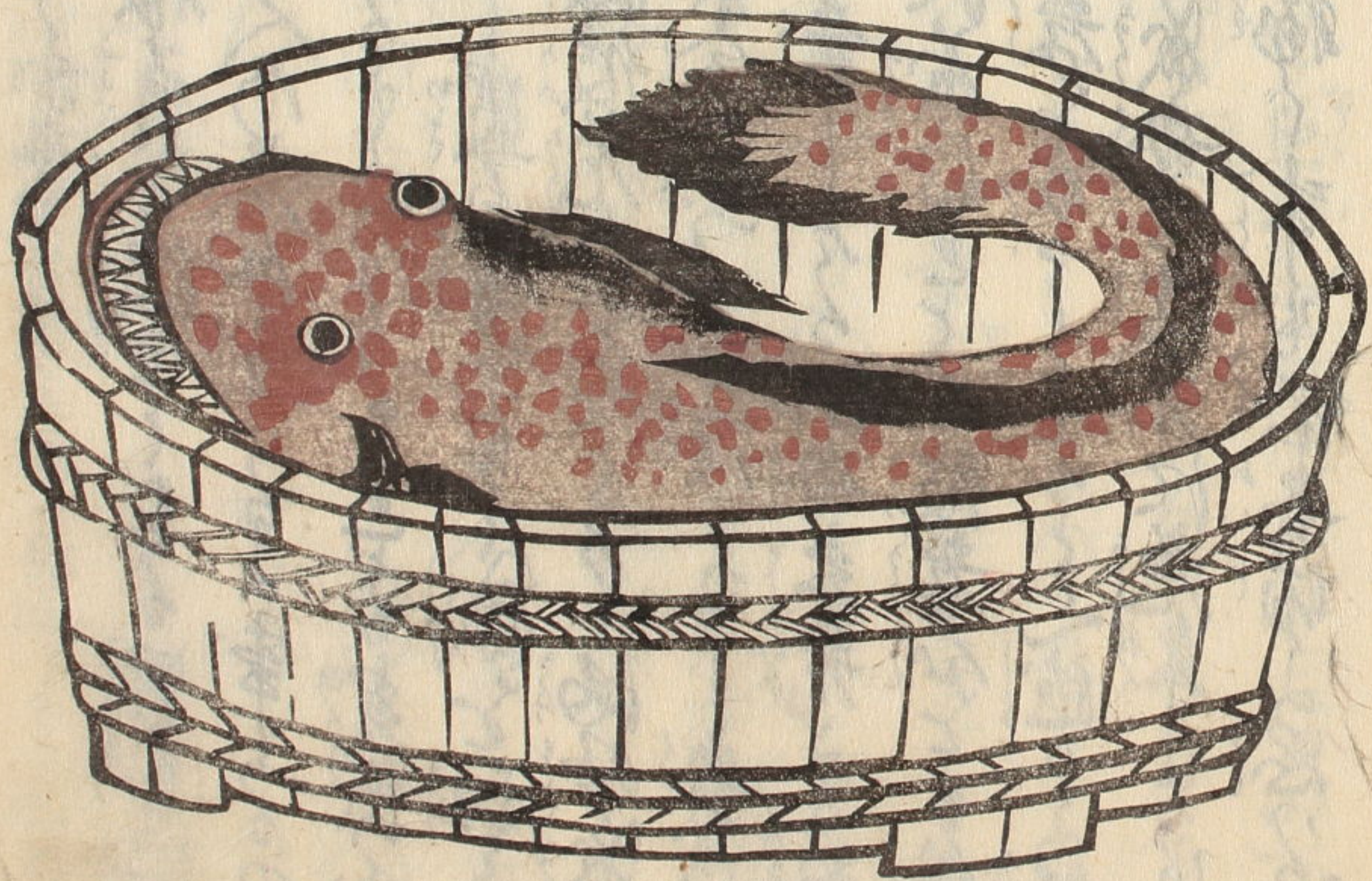
虎渡の國名古名の中中と云ふ所の町渡りよは川と云有  
川中僅に同くは川と云ふ事 天保八年丁未七月魚前乃事なるがけ  
川をり作を河と云ふは魚渡りよ小橋のりよと云ふの事  
大勢者合本中へ入遊び居りよ川と云ふり行つた成との  
ありてあり一故振返り見ると雲怪成りの夜彼童子  
其の皆く終りて唯ちぬをと揚ぐ陸(迎揚り)より  
くまはまをり居合せける者も無算りて何事ぞと尋  
問ふよあつてと云ふ故物行成とのり見居んと云ふ事次の  
花へ移りよのりありと見ると云ふは是れ中と云ふ事

願結よと云ふ一見則ち魚の女と云ふの故人よ又次の橋  
廻りよあると云ふと見ると見ると云ふ事成願の先一と云  
成はよと云ふと云ふと生先と云ふはなり兼ける怪物故  
唯も捕押入ると云ふ者もあつと云ふ事一版より人遊と  
居ると云ふと云ふの男よ男尊甚愛仕年と云ふ事と云ふり  
居合せし事と云ふ等夜廻りよ大傳馬河と云ふ町の  
橋の下より忽ち水中へ飛入大成たを網と云ふ力にて  
願と押入たこと何れ大魚のりなりと云ふ事何れは魚の  
まきまきと云ふ物成毒魚のり魚と云ふ事何れは魚の故と云ふ  
抱へ揚ると云ふ事何れは魚のり難うと云ふ事何れは魚のり  
たえむりに入試ると云ふ事何れは魚のり尾の方曲りて  
漸く入りぬと云ふ事何れは魚のり方八合と云ふ事何れは魚のり

眼は長くく歯も大張の如く歯もく脇緒ハ尋常  
 尖の如く尾をまき鱗の如く鱗は鱗より肌  
 帳巻の如く茶葉の如く病の如くむし肌も有り  
 腹を崩の雲文の如く後をく後の下は鱗の  
 鱗は夏ト冬ト時よ生息くくくくくくくくく  
 左右よ内付ハツ付たりま形ち先鱗尖の如く  
 口に鱗尖成つてくくくくくくくくくくく  
 也行成尖く事分り兼くくくくくくくくく  
 と云大川より分氷庄内川と云大川と依被く用水  
 引く氷く勝川も水派ハ山川ちくくくくく  
 川よくくくくくくくくくくくくくくく  
 種の淵瀬もなり支分江川初分氷の後ハ産も見

ゆふくくくくくくくくくくくくくくく  
 ども如何くくくくくくくくくくくく  
 事くくくくくくくくくくくくくくく  
 温順優長なるものくくくくくくくく  
 新納備の類と異一城のくくくくくく  
 尖と食くくくくくくくくくくくく  
 乞更くくくくくくくくくくくくく  
 予が若輩氷野金流と云者ハ中下の者くく  
 少くくくくくくくくくくくくくく  
 吹く書記一巻くくくくくくくく  
 山くくくくくくくくくくくくく  
 用水くくくくくくくくくくくく  
 勿備くくくくくくくくくくく





背

腹



腹よゆきと見へり  
あつて指先の所  
背の妙なりと云ふ

いとも現を捕得たる事なるは鮫の類に似たりとせり  
多くの怪物もあつたものなりと云ふ事なりと云ふ  
事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ



おむらまへ何と云も孝と云はてしなくもびつた女に  
河の松の母がさういふのよと云はれしは好む事ある  
中もさうも妻と云と巻く後いふも前のさう  
老母も人善とせらるるは或時何事うさうは男の  
屋根葉伴は家へ来集り酒をぐ強きさう  
約束さうと最後より仕事も休む酒をたさ者  
松のものも二三種揃へるの事と待てるよさう  
何事せん俄の用事出来く二人も来さうと南  
掛酒も者も澤山あり河まりの事常々後後  
ゆゑ母も存分酒も飲ませりきや我天のり  
母も無へよさう松も澤山は物の事さう  
さうさう酒も者も達りの老母と食う一はふま

老母も何さう大泣びさう酒も救世傾け者も悉く  
食すさう心持さう外戸は入件男もさうさう  
所付く種さうゆりしたる角は竹の老母のあさう  
音の類りよさうさう物行さうあさうやさうと怒て  
とさうもさう竹の女は老人の河まりのやゆり任せ  
竹の母もさうめさうさうさうありさうのさうと  
心と痛めさうなり乾さうさうと彼母近年のりさう  
出さうさう酒もさうが故もさうさうさうハ何事も好  
まうと早速大とありさうと焼くさうと森回と見さう  
こはりの母さうさうさうさうさうの母の者物と云  
酒は酔外たさういもさうさうさうさう熱膳せさう  
新の音さうさうさうのさう彼男も酒は行と酒さう

能く性乃静まりくか別々とのと名傳と事と  
思ふよりのとを猫僕の子ありくも去建もは雲と見く  
是切も色止つとよ水どくと心と交し先絶とん彼猫の  
あもとあまんと能く徳りするよ天運乃るるありや  
能く辨つるかといえ猫ハかしも昔のそと神ありき  
近隣美村中心安き友甚たを年秀ちどとを記し  
大勢相態の類と持く肉ハ入く見らるよ猫ハまご森  
入居のま竹の難他もろくそ終は生捕とろくぬ様  
己去し事と篤く考見らるよ三年修り心清酒も好と  
ありそらもろくか〜成爲るものもゆりと嫌ひ息  
あ〜一緒のあり居るとつやがり修らるもの森ると云も  
う〜一間の〜成修障子〜は知せ外り〜根よ成〜故

幸乃親を食くは猫僕が食〜名〜名乃肉と云  
所乃隠る〜母の求あるよ板の下圍煖裏の〜ま〜に雲の  
老母の骨ハま〜よせ隠〜〜故よは猫と母と  
捕食の〜〜母〜化整り居らるにお遠ら〜〜人〜も  
泳驚きと悲〜と進村〜と笑えらるま〜傾〜も河〜代友  
収〜と彼猫と速行〜〜汗液もろく〜〜後ハ猫と  
彼男〜と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜知故  
西交親乃歌つるよバ生並〜〜に河〜〜と〜あ出友板の  
もの〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
り産め猫僕塚〜と云ちい成石碑と建〜と〜この事  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
は左ハ回成故彼着作も知者〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

猫  
俣



五  
五  
十一



支  
彬  
三



あつと吐り吐りさうさうせ馳形〜見来り〜也を猫の  
形を如何者吐り吐り此猫僕より〜やうと具よ丹子  
うらに成程猫僕より〜ちささるに江戸は居る松村大ひ  
る女程を江戸の大上りのたより一板大ひ去うが〜大い大に  
替り〜ものよ〜金猫故顔より〜大よりい甚だしく  
そ顔の太さるる恰好い少く猫の別合ちか〜見馴ぬ  
ゆ急陣の外さ〜〜も是も大乃お川也も六川也  
何り是も大と見入るるり〜い甚だ〜恰好い見え  
赤文の茶と白黒の〜と〜尾乃長き〜事是又  
大は太ひよお遠〜〜は猫も〜先七八寸程二ひ  
〜も眼〜あり居〜酒ハ〜夜二杯及び呑る〜  
畜生の漬ま〜〜思ひ〜ぬ養食よ〜と

奪りも〜と〜と〜能〜時高の〜のよ  
件乃太の目よ初さる時を早頃〜大松根三三  
葉〜を夜拾ひ人け〜番と〜居るは猫と〜  
奪文〜〜〜〜居見抱の人〜立葉ひ  
値是〜口買交さる細〜〜目と鼻〜〜眼中の  
尖さ〜大や馬〜と〜大遠い〜る変眼精〜を砂に  
冥〜眼を如何事〜と〜且つ松の〜と〜  
〜〜思つ〜る中ま〜〜〜も〜  
居る根の〜も同心の〜と〜遊人〜  
見〜〜今〜も彼地〜〜は〜  
猫後塚の目筋あり〜村の名件乃男乃名領を  
〜も葉交〜〜能〜也〜も二十とを除くと

猫俣

五ノ五十二

神々の筆記せしむるを忘るるは神の多しは事ハ人の  
年の事うと再後史記もたとも衆議の者於年号  
うぐ覚えもうしぬが幾門の年の事と号んえりてと故  
至時年と標度一見りり寛政八年頃の事と  
あしきしり

武別在原於山澤村表叢寺 漢語大明神 可雲和尚の法と

因し日向嶺まのり彼男八幡と湯の一時何ぞ孝り  
乃獲美ハありし一幡とあぬハ九丈の事うま六  
五尺うをぬと新斗り西孝の者も世に於事  
うまハまき竹の賞一おもるうと押量ぬハ  
一条ハ幡うへ化うる奇事のもの事ハぬと他日  
孝子傳と撰びハ必加へ入る事實之と尋ゆらん

とては世と変るるも今嘉永二年よりハ二十餘年の  
昔の事うと平年若成時分故別と是木の事ハ  
何ぞと支漏一とて妙念の事ものともとハ尋り  
りて心伝有る事と

萬本終と化する神社の事

京師下加茂の神社ハ古俗比叢木大明神と稱する社を  
鹿鹿の事と願ひて物を成地の後ハ先ハ終の本と  
よきとも外の本ともなるものもあらしむと終るよその本  
皆終る変化すると変及び居り平天保九年成彼地  
ありし時進つ社と名指す能く見侍るよ神社  
乃月方六回もありつらん種々の本もとも皆終る事と  
生一木終全本終と成る多し本橋を橋本殿山櫃子





南天の木根葉振とも早速に葉下兼  
 高のゆへ南天の傍ゆへ葉下兼

南と生ぐり  
 ちり居るり



何ぞ沢有奉と先角へ南天と  
 多く納り奉りて終武三寸のみす  
 中の納りての震せざる南天も多色色も  
 手仲も色納りて年終るるのやげの  
 ま能終の系と震下居るるも数株あり

直一故本をあらうと面々尋ひ索ととも板橋の  
 震ぐりハ一株も有先早急震化とたの終と成  
 奉を見えり長くも神佛の利益ハ怪変とよ量り難と  
 との之 伊豆の國瀬雨神の社本と同族 ねは神の奉ハ都府不遠  
 とも見えんむ竹の神よかりゆせとやんよ尋とも唯比  
 良本大の神とり奉の之急居と近京地とハ十社あり振  
 云奉流り出すは神もそ角とてま指人多く先人の  
 志る社つとまども神降ハ多り兼りり何社況の勢と怒り  
 吹揚るよ祭神ハ素盞高言とて地社武内ハ神とく  
 別出雲并於神社とてり大嘗會新嘗祭の四社奉とて  
 の祭よ園りかりゆせと神とて地土の神とては神社  
 のり西今ノ系とむりて出雲大路又と出雲の神とて

地名も社あり出 四号の由  
 文徳天皇仁壽二年の夏月鹿野流行人氏夜死多し時  
 勅使付社り意向の初社人より社よりありま 鹿野の夜  
 社指し除くべきに鹿野ありま 比良本大明神と作  
 するに 比良本は比良本比禮寺の縁宿あり  
 まましく本社乃日記のを見え又除夜の人家の門戸のよ  
 於の枝と夜夜社と遊しと比良本大明神の鹿野と  
 傳え 由今の世よりても小児の鹿野の憂と除んと  
 くは社より祈願もれが必を験多し鹿野鹿野と之怨も  
 角も眼のあり 弟本終と變化すると相 なるは社人の  
 室の なる事 なると思ふ なるも なるは事  
 想山著 厚集卷の五 終

反



三妙想 坐辰本篤 奉三教 予方外出爰也  
 以善書 聞文道 極廣奇 談異味 聞而識 出  
 月益歲 多恐其 久而遺 忘也 乃錄 爲數十  
 冊名曰 著聞奇 集談雖 俚俗 嗚係 報應 意  
 欲福也 以爲 少繫 勸懲 出資 也予 以爲 談  
 世事也 已謂 止奇 異不 常存 故久 徒不

疑則謗。最信焉者鮮矣。今居士必取與的  
證。詳與。顛末與。地與。時鑿。有徵不墮。浮雲  
竊根。出言足以取覽者。出信。斯可以為衆  
善。奉行諸惠。莫比。出助矣。方今

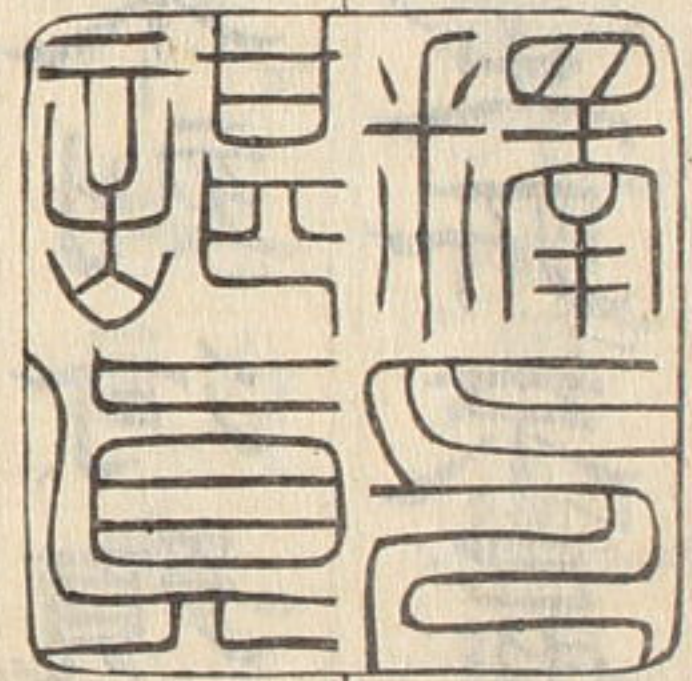
昭代。出化。苟有裨益。在教者。槩皆鏤板。公  
諸。迨況此集。哉。宜為天。下後。返勸懲。出資  
也。奚止為一家。出。孫。哉。慈。惠。刻。出。居士。謙

讓。不。肯。曰。是。奚。足以。傳。也。矣。會。與。門。久。濃  
州。苗木。藩。士。青。坐。坐。來。訪。予。而。谷。精。舍。因  
試。言。出。青。坐。坐。喜。而。旋。嘆。固。請。居士。稍。贊  
命。不。嗚。呼。刻。與。不。刻。何。預。吾。事。而。諄。不  
已。乃。一。片。利物。婆。心。出。所。不。最。尺。也。亦。吾。輩。出  
任。也。不。知。者。以。為。妙。事。與。復。何。傷。若。夫。辭  
藻。出。末。則。居士。出。所。不。屑。也。矣。予。亦。奚。暇

論焉

嘉永三歲次庚戌益春念八日江都鎮護

坐蓮堂真



苗木藩


青坐直意漢隸



不可思議之世に於て人の心はかくも  
均如き心をもつて也。坐言、入本道の御  
想山大入り年々、後人の心もかくも  
了は福也。一區は、は福の心も如婦  
婦も如く、の六つ、の心も如く、  
とまじき、一まじく、筆志、  
結ひ多敷、反古、若干、  
きり、入の心、め、ふ、の、勢、  
子孫

初戀の爲に中へいへい冊子に  
書よとていへい一巻六人書は  
たひくと書冊子とたへい一  
又毎小句一久あつて撰本  
録き入るんをも登さけ種  
なり志と書冊子とたへい  
ましとていへい一巻六人書  
や一巻六人書冊子の書冊子

に中へいへい一巻六人書  
と書冊子とたへい一巻六人書  
也と有るに中へいへい一巻六人書  
まほく後の書冊子とたへい一巻六人書  
あつていへい一巻六人書  
あつて

あつていへい一巻六人書  


青山直意藏



津坂光齋書

早川可靜刻

嘉永三年庚戌十一月刻成



